

左 口 遺 跡 II

— B地点の調査 —

本 庄 飯 玉 遺 跡

北 堀 新 田 遺 跡 III

— D地点の調査 —

2 0 1 3

本 庄 市 教 育 委 員 会

さ ぐち い せき
左 口 遺 跡 II

— B地点の調査 —

ほん じょう いい だま い せき
本 庄 飯 玉 遺 跡

きた ぼり しん でん い せき
北 堀 新 田 遺 跡 III

— D地点の調査 —

2013

本 庄 市 教 育 委 員 会

序

本庄市は、埼玉県北部の交通の要衝であります。関越自動車道・本庄一児玉インターチェンジを控えているところから付近には工業団地等が造成され、また上越新幹線本庄早稲田駅周辺においても土地区画整理事業が進行しております。ここに報告する左口遺跡は、県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として昭和63年度に発掘調査が実施されております。この調査では古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代後期の竪穴住居跡、また垣状遺構や鍛冶遺構等が検出されており、その成果は『平塚・左口・児玉条里遺跡』に掲載されております。このたびの発掘調査は、この『平塚・左口・児玉条里遺跡』に掲載された調査区域の南側の隣接地に相当し、古墳時代後期の集落の一部が明らかとなりました。一方本庄台地北側の段丘崖上に立地する本庄飯玉遺跡は、今回初めて発掘調査が実施された遺跡ではありますが、これまでに行われてきた周辺地域における試掘調査および発掘調査の成果や、本庄東中学校新校舎建設に先立って発掘調査が実施されている薬師堂東遺跡の状況から、古墳時代から奈良・平安時代にかけての、隣接して展開する集落群の一部を占めるものと考えられます。そして北堀新田遺跡は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に先立ち平成18年度に実施され、また平成21年度には集合住宅建設に伴う発掘調査が実施されております。この本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に先立つ発掘調査は、北堀新田遺跡はもとより周辺の北堀久下塚北遺跡、久下東遺跡、久下前遺跡、北堀新田前遺跡といった数多くの遺跡に及び、また発掘調査の総面積は約58,000㎡に至っております。これら多数の遺跡の発掘調査の成果から、周辺地域における古代の様相が明らかとなってきております。本書で報告する北堀新田遺跡は、北堀久下塚北遺跡、久下東遺跡、久下前遺跡、北堀新田前遺跡といった古墳時代から奈良・平安時代の集落遺跡が東西に連なる様に存在し、大規模な遺跡群を形成しているうちの東端部分にあたり、古代集落の具体的な様相の一端を明らかにすることができました。

この発掘調査の記録は、本書によって永く後世に伝えることになりましたが、このような記録の積み重ねによって、少しずつではありますが、私たちを育ててくれた地域の歴史への理解が深まっていくことでしょう。ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、高橋仁一氏、岩田浩平氏、狩野修司氏をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様の協力の賜と深く感謝いたします。この調査報告書が、この地域の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成24年3月22日

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町蛭川100番地2に所在する左口遺跡（県遺跡No. 54-020）B地点、同市東台3丁目3809-2・3806-11・3806-8に所在する本庄飯玉遺跡（県遺跡No. 53-020）及び、同市北堀1548-1に所在する北堀新田遺跡（県遺跡No. 53-062）D地点の発掘調査報告書である。
2. 各調査地点の名称については、左口遺跡が本報告地点北側において昭和63年10月3日から平成元年1月17日にわたり、県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ発掘調査が実施され、その成果は「左口遺跡」（徳山 寿樹、1994）として報告されており、本書所収の調査地点が2地点目となることから左口遺跡B地点と呼称する。

本庄飯玉遺跡は、本報告地点が初の発掘調査地点となる。従前は本庄20号遺跡と称されていたものである。本報告発掘調査に先立ち、大字および小字名から本庄飯玉遺跡と名称の変更を行った。（平成22年5月27日付け、本教文保発 第56号にて埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）を埼玉県教育委員会教育長あてに提出。）

北堀新田遺跡は、平成21年4月4日から同月28日にわたり集合住宅建設に先立つ発掘調査が実施され、「北堀新田遺跡」（佐々木 藤雄、2010）として報告されている。さらに本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴い平成21年度から翌22年度にかけて、2地点（A1・2地点、B地点）の発掘調査が実施されており、その一部は「北堀新田遺跡Ⅱ（A1地点）」（松本 完、2010）として報告されている。本書において報告する調査地点は、上記のように4地点目となることから北堀新田遺跡D地点と呼称する。
3. 発掘調査は、3遺跡ともに個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
4. 発掘調査および整理・報告書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・市費である。
5. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。

左口遺跡B地点

自 平成21年12月14日（月）
至 平成22年1月6日（水）

本庄飯玉遺跡

自 平成22年6月1日（火）
至 平成22年6月12日（土）

北堀新田遺跡D地点

自 平成23年6月1日（水）
至 平成23年6月13日（月）

6. 発掘調査の担当は、本庄市教育委員会文化財保護課 太田 博之・大熊 季広並びに的野 善行があたった。
7. 報告書刊行のための整理作業及び報告書作成作業は、整理作業参加者および太田 博之・恋河内 昭彦・松本 完・的野 善行の協力を得て、大熊が行った。
8. 本庄飯玉遺跡並びに北堀新田遺跡D地点に関する発掘基準点測量・遺構等の測量は、株式会社 共同測地開発に委託した。
9. 本書所収の3遺跡に関する遺構図修正及びデジタルトレース作業は、株式会社 測研埼玉支店ほんじょう事務所に委託した。
10. 本書所収の3遺跡に関する遺物実測・観察、拓影図作成及び写真撮影等の遺物整理作業は、有限会社 毛野考古学研究所に委託した。
11. 本書所収の3遺跡に関する遺構・遺物図版等作成作業は、有限会社 毛野考古学研究所に委託した。
12. 本書の編集・執筆は、整理作業参加者の協力を得て大熊が行った。
13. 発掘調査及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記して感謝いたします。

岡 稔 池田 敏宏 金子 彰男 坂本 和俊 新海 基史 外尾 常人 田村 誠 中沢 良一 中平 薫
長瀧 歳康 東野 豊秋 丸山 陽一 矢内 勲

14. 本書に関する資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。
15. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査組織（平成21年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	茂木 孝彦
事務局		事務局 長	腰塚 修
	文化財保護課	課 長	儘田 英夫
		課長補佐兼文化財保護係長	鈴木 徳雄
		主 査	恋河内昭彦
		主 任	松澤 浩一
		主 任	松本 完
調査担当		埋 蔵 文 化 財 係 長	太田 博之
〃		主 査	大熊 季広
〃		臨 時 職 員	的野 善行

発掘調査、整理・報告書刊行組織（平成22年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	茂木 孝彦
事務局		事務局 長	腰塚 修

文化財保護課	課長	金井 孝夫
	副参事兼課長補佐	鈴木 徳雄
調査担当	主査	恋河内昭彦
調査・整理担当者	主任	松澤 浩一
調査担当者	主任	松本 完
	埋蔵文化財係長	太田 博之
	主査	大熊 季広
	臨時職員	の野 善行

発掘調査、整理・報告書刊行組織（平成23年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	茂木 孝彦
事務局		事務局 長	関和 成昭
	文化財保護課	課長	金井 孝夫
		副参事兼課長補佐	鈴木 徳雄
		主 幹	恋河内昭彦
		主 査	松澤 浩一
		主 査	松本 完
調査担当者		課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
調査・整理担当者		主 査	大熊 季広
調査担当者		臨時職員	の野 善行

発掘調査、整理・報告書刊行組織（平成24年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	茂木 孝彦
事務局		事務局 長	関和 成昭
	文化財保護課	課長	金井 孝夫
		副参事兼課長補佐	
		兼歴史民俗資料館長	鈴木 徳雄
		主 幹	恋河内昭彦
		主 査	松澤 浩一
		主 査	松本 完
調査担当者		課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
調査・整理担当者		主 査	大熊 季広
調査担当者		臨時職員	の野 善行

凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図・各遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 本書所収の地図のうち第2図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」(平成8年発行)をもとに、また第3図は「(旧)児玉町都市計画図 No.6」1/2,500(平成12年修正)を、第15図は「本庄市都市計画図12」1/2,500(平成10年測量)を、第23図は「本庄市都市計画図17・18」1/2,500(平成10年測量)をもとに加筆・作成した。

3. 本報告書の図中における各種遺構の略号は、下記のとおりである。

SI…竪穴住居跡 SK…土坑 SD…溝址

4. 本書報告書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に下記のとおりであるが、紙幅の関係からこれに当たらない場合には、個別にスケールを付した。

[遺構図]

[遺物図]

竪穴住居跡…… 1/60

土 器…… 1/4

〃 カマド…… 1/30

土製品…… 1/2

〃 貯蔵穴…… 1/30

石製品…… 1/2

土 坑…… 1/60

ピ ッ ト…… 1/30

5. 遺構断面図の水準数値は海拔高度を示し、その単位はmである。
6. 遺構断面図のスクリーントーンは地山を示す。
7. 観察表中におけるNo. 欄における数値は、各出土遺物図中の番号ならびに各遺物出土状況図中の番号、遺物写真図版中の番号に、それぞれ対応している。
8. 出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。

A—法量(単位はcm、g、カッコは推定)、B—成形、C—整形・調整、D—胎土・材質、E—色調、
F—残存度、G—備考、H—出土層位・位置

目 次

序

例言

凡例

第 I 章	発掘調査に至る経緯	1
第 1 節	左口遺跡 B 地点	1
第 2 節	本庄飯玉遺跡	2
第 3 節	北堀新田遺跡 D 地点	3
第 II 章	遺跡の地理的・歴史的環境	5
第 1 節	地理的環境	5
第 2 節	歴史的環境	6
第 III 章	左口遺跡 B 地点の調査	11
第 1 節	遺跡の概要	11
第 2 節	検出された遺構と遺物	12
1.	竪穴住居跡	12
2.	土 坑	19
第 IV 章	本庄飯玉遺跡の調査	
第 1 節	遺跡の概要	21
第 2 節	検出された遺構と遺物	22
1.	竪穴住居跡	22
2.	土 坑	27
第 V 章	北堀新田遺跡 D 地点の調査	
第 1 節	遺跡の概要	31
第 2 節	検出された遺構と遺物	31
1.	竪穴住居跡	31
2.	溝 址	36
3.	土 坑	36
4.	ピ ッ ト	40

第VI章 まとめにかえて 42

参考文献 42

写真図版

報告書抄録

第 I 章 発掘調査に至る経緯

第 1 節 左口遺跡 B 地点

平成21年10月19日、高橋 仁一氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市児玉町蛭川100番地2にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地 左口遺跡（県遺跡No. 54-020）に隣接することが判明した。

左口遺跡は、昭和63年10月3日から平成元年1月17日にかけて、県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ町内遺跡群保存事業として（旧）児玉町教育委員会により発掘調査が実施され、古墳時代前期五領式期の方形周溝墓1基、古墳時代後期鬼高式期の竪穴住居跡3軒、時期不明の竪穴住居跡4軒の他、土坑51基、垣状遺構2列、溝状遺構39条、鍛冶状遺構1基が検出されている。この発掘調査の成果は、「平塚・左口・児玉条里遺跡」（徳山他、1994）によって報告され、女堀川によって形成された低地帯中の自然堤防上に営まれた、古墳時代の集落遺跡の一つとして知られていた。

平成21年10月27日に、本庄市教育委員会文化財保護課職員による現地踏査が行われた。照会地北側に所在する左口遺跡から当該事業計画地は、女堀川右岸の自然堤防上にあたり平坦な地形として連続しており、また周辺の耕作地においても土師器片等が観察されたことから、遺跡の範囲が当該地に及ぶ可能性が高いことが確認された。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡範囲の確認のために試掘調査を行うこととし、平成21年11月4日に現地調査を実施した。この調査では事業主側の希望により、建築予定地の外側部分において確認調査を行った。その結果、現地表下60cmにおいて古墳時代の竪穴住居跡等を検出し、その一部が建築予定部分に続いていることが確認され、また左口遺跡が当該事業予定地に及んでいることが明らかとなった。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の成果に基づき平成21年11月10日付け、本教文保発 第145号により左口遺跡における『埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）』を埼玉県教育委員会教育長あて提出した。

その後高橋氏により地盤調査が実施され、地耐力不足のため基礎部分の設計が変更になったとの連絡があり、変更部分の設計図面の提出を受けた。この計画図によれば建築予定区域全域にわたり、地下3.5mに及ぶ直径45cmの柱状改良を合計25箇所行うというものであった。

これを受け、建築予定部分における遺跡保護の基礎資料を得るために、試掘調査が同年11月12日に実施された。この調査では建築予定地内に2本のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、現地表下45～65cmにおいて古墳時代の竪穴住居跡4軒、土坑等の埋蔵文化財が確認された。

これらの試掘調査の成果を踏まえ事業主体者に対し、『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である左口遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により、『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万

全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することとの旨を通知した。

その後保存に向けた協議が行われたが、地盤強度の問題から設計の変更は困難であるとの結論に達した。

平成21年10月19日付けで、高橋 仁一氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を同年12月14日付 本教文保発第161号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また同12月14日付け本教文保発第162号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成21年12月22日付け教生文第5 - 943号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

なお、先に記した平成21年11月10日付け、本教文保発 第145号による左口遺跡における『埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）』の提出に対しては、埼玉県教育委員会教育長より平成21年12月7日付け、教生文 第9 - 52号による『埋蔵文化財包蔵地の周知について』の通知があった。

第2節 本庄飯玉遺跡

平成22年3月26日、岩田 浩平氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市東台3丁目3809-2、3806-11、3806-8にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 本庄20号遺跡（県遺跡No. 53-020）が所在することが判明した。

平成22年4月から5月上旬にかけては、大・中規模開発及び個人住宅建設に先立つ試掘調査が集中し、その合間を縫って同年4月30日に、本庄市教育委員会文化財保護課職員による現地踏査が行われた。照会地南側の耕作地における地表面には、多数の土師器片等が観察されたことから、照会地においても遺構が所在する可能性が高いことが予想された。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成22年5月18日に現地調査を実施した。

この調査では建築予定部分の南側に1本のトレンチを設定し、遺構の有無及び遺構確認面までの深さの確認を行った。このトレンチにおいては現地表下45~60cmにおいて堅穴住居跡が確認された。このトレンチにおける成果と建築基礎掘削深度から、保護層の確保が困難であることが予想されたため、さらに建築予定地内に2本のトレンチを設定し確認を行った。この2本のトレンチにおいては、現地表面から35cmの深さにおいて2軒の堅穴住居跡及び土坑等の埋蔵文化財が確認された。

これらの試掘調査の成果を踏まえ事業主体者に対し、『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である本庄20号遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により、『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することとの旨を通知した。

その後保存に向けた協議が行われた。この協議では、照会地の現況が周辺の道路より30cmほど高くなっており遺跡保護のためにさらに盛り土造成を行うと、日常生活に支障が生じることが予想され、

設計の変更は困難であるとの結論に達した。

平成22年3月26日付けで、岩田 浩平氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を同5月27日付 本教文保発第55号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また同5月27日付け本教文保発第57号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成22年6月25日付け教生文第5-296号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

なお本遺跡は、従前本庄20号遺跡と称されていたため、本書の所載の発掘調査に際し、遺跡名を付すこととなった。平成22年5月27日付け、本教文保発 第56号により、「本庄飯玉遺跡」への名称変更のための『埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード(変更増補)』を埼玉県教育委員会教育長あて提出した。これに対しては、埼玉県教育委員会教育長より平成22年6月23日付け、教生文 第9-17号による『埋蔵文化財包蔵地の周知について』の通知があった。

第3節 北堀新田遺跡D地点

平成23年5月9日、狩野 修司氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市北堀字新田原1548-1にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。

同氏の計画では、照会地の地盤強度の関係から基礎部分において総数31本、直径60cm、深さ1.5~3.0mの湿式柱状改良工法による柱状改良体を施工する予定であった。

これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地 北堀新田遺跡(県遺跡No. 53-062)が所在することが判明した。

北堀新田遺跡は、本報告発掘調査地点の道路を挟んだ東側隣地において、平成21年4月8日から同年4月28日にかけて、集合住宅建設に先立つ発掘調査が本庄市教育委員会により実施されている。この発掘調査においては平安時代前期の竪穴住居跡3軒、溝址2条、土坑8基が検出されている。またこれらの遺構からは、「上」・「中」・「十」と墨書された土師器・須恵器の坏形土器が出土している。この発掘調査の成果は、「北堀新田遺跡」(佐々木 藤雄、2010)によって報告されている。また照会地西方においては、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が平成21年度から平成22年度にかけて実施され(北堀新田遺跡A1・2地点、同B地点)、女堀川及び男堀川の下流域に形成された低地帯中の自然堤防上に営まれた、古墳時代から平安時代にかけて集落遺跡の一つとして知られていた。

教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成23年5月23日に現地調査を実施した。

この調査では、柱状改良工事が計画されているため建築予定部分に2本のトレンチを設定し、遺構の有無及び遺構確認面までの深さの確認を行った。この調査の結果、北側に設定したトレンチにおいては、遺構は検出されなかった。これに対し南側のトレンチにおいては現地表下50~60cmにおいて、トレンチのほぼ全域にわたり暗褐色土層を覆土とする遺構が検出された。これらの確認された遺構の外形は、変換点を有する直線状の辺構成と矩形を構成しない辺を有することから、角度を違える複数の竪穴住居跡が重複しているものと考えられた。これらの遺構はまたこのトレンチ南側、すなわち建

築予定部分南側に展開することが明らかとなった。

これらの試掘調査の成果を踏まえ事業主体者に対し、『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である北堀新田遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により、『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後の協議では、試掘調査の成果から照会地南側においても遺構の所在が予想されること、また建築予定地を南側に移動しても地盤強度の問題が同様に発生することが予想されたため、設計の変更は困難であるとの結論に達した。

平成23年5月9日付けで、狩野 修司氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を同5月30日付 本教文発 第51号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また同年5月31日付け本教文保発第59号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成23年6月9日付け教生文第5-242号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。 (本庄市教育委員会事務局)



平成 21 年度 左口遺跡B地点 試掘調査風景写真（南西から）

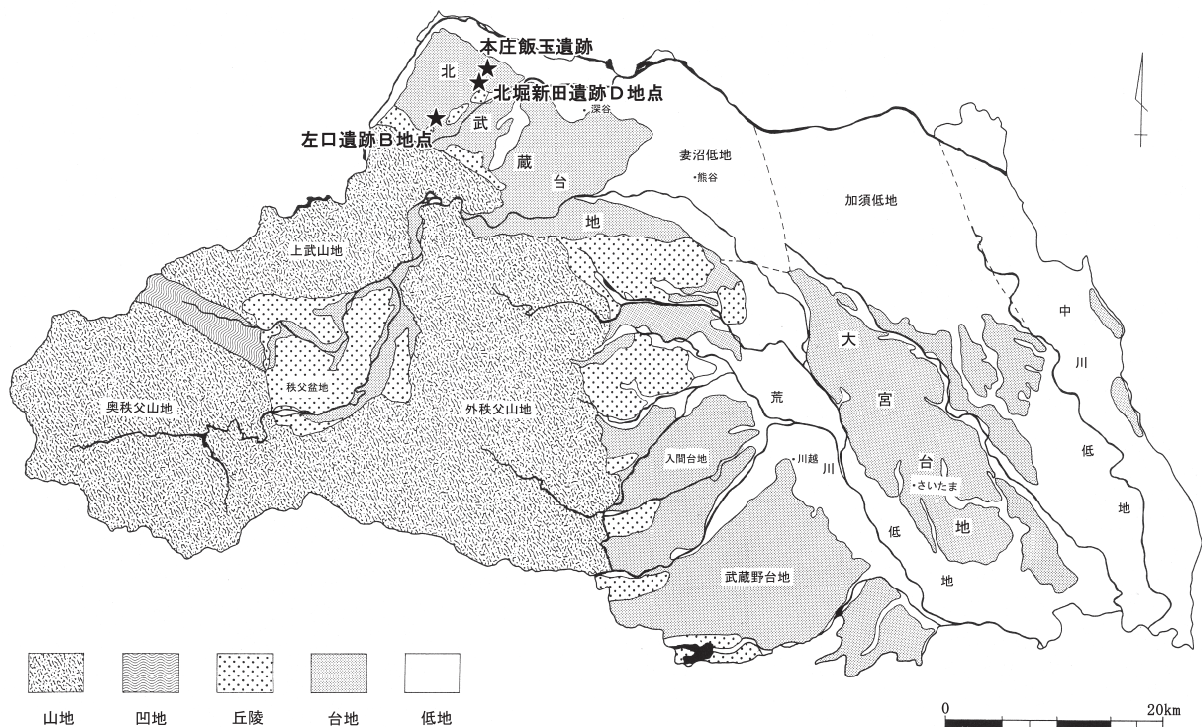
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本書で報告する左口・本庄飯玉・北堀新田遺跡の所在する本庄市は、埼玉県北西部に位置している。市域の東側は深谷市および児玉郡美里町と、西側は児玉郡神川町、南側は秩父郡皆野町および長瀨町、北西側は児玉郡上里町、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。平成18年、本庄市および児玉町の合併により、市域は北東端の利根川から南西端の上武山地に至るにおよび、その長さはおよそ20kmを測り、面積は89.45k㎡に至った。

本庄市の地形は、南西部の山地および丘陵、中央部に相当する児玉市街地から本庄市街地にかけての台地、北東部の利根川右岸に展開する低地に大別される。山地部分は、上武山地と呼称され、群馬県西南部の赤久縄山を中心とする地域と、埼玉県北西部の標高1,037mの城峯山を主峰とする山地の総称であり、南東から北西方向へと展開している。丘陵部は、上武山地の裾部から北東方向へと半島状に延び、児玉丘陵と呼称されている。この児玉丘陵からは、第三系の生野山丘陵・大久保山丘陵が断続的に延長している。

台地部は、身馴川扇状地と神流川扇状地の複合地形であり、本庄台地と呼称されている。台地上には南西から北東方向へ流下する中小の河川が流下し、河川周辺部は沖積化が進行している。台地北端部は上里町金久保付近から本庄市鶴森にかけて段丘崖を形成し、この段丘崖を隔てて、利根川右岸の低地と接している。低地部は、利根川や烏川による氾濫原であり、自然堤防の発達が顕著で、下流域の妻沼低地、加須低地へと連続している。



第1図 埼玉県の地形

本書所収の左口遺跡は、J R高崎線本庄駅より南西方向約4.7km、J R八高線児玉駅より北東方向約2.1kmに位置し、本庄台地と生野山丘陵に挟まれた女堀川中流域に相当する低地帯中の微高地上に所在している。一方本庄飯玉遺跡は、J R高崎線本庄駅より北東方向900mに位置し、本庄台地から低地へと移行する段丘崖上付近に占地している。段丘崖からの距離は約230mである。現在周辺は市街地となっているが、本庄飯玉遺跡の古代集落が営まれた当時には、北方に続く低地帯と利根川の流れ、どっしりと聳える赤城山の雄大な姿が眺望されたことであろう。

北堀新田遺跡は、J R高崎線本庄駅より南方向約1.6km、J R上越新幹線本庄早稲田駅の北東方向約600mに位置している。この周辺は、本庄台地南端部と大久保山丘陵の間の低地帯に相当し、本遺跡は北東方向に流下する男堀川・女堀川に挟まれた微高地上に所在している。

第2節 歴史的環境

左口・本庄飯玉・北堀新田の各遺跡は、古墳時代から平安時代にかけての集落を中心とした遺跡である。周辺地域における弥生時代遺跡の特徴は、集落形成が比較的低調であるということがあげられよう。弥生時代中期の遺跡としては、丘陵部にいて土坑群が検出された浅見山I遺跡(5)、また低位段丘や台地部においてやはり土坑が確認されている今井条里遺跡(b)や児玉清水遺跡(65)及び夏目西遺跡(80)があげられよう。また、根田遺跡(22)、四方田遺跡(23)、雷電下遺跡(24)、笠ヶ谷戸遺跡(33)、小島本伝遺跡(117)においては、遺構は検出されていないものの、当該期の遺物が確認されている。弥生時代後期においては、丘陵上や丘陵裾部の低位段丘及び微高地に、小規模かつ短期的な集落が形成されるようになる。このような遺跡には、浅見山I遺跡(5)、大久保山遺跡(6)、山根遺跡(21)、飯玉東遺跡(25)、生野山遺跡(G)、美里町塚本山遺跡(B)があげられよう。これらの遺跡のうち、大久保山・生野山遺跡からは吉ヶ谷式土器が、山根・飯玉東遺跡からは樽式土器、また塚本山遺跡からは二軒屋式土器が出土しており、該期における活発な人的・物質的な移動あるいは交渉の様子が窺える。

古墳時代に至ると、集落遺跡の形成は前時代と比較し急激な増加を見せ、その占地も台地縁部や沖積化が進行した低地内の自然堤防や微高地上へと移動している。これらの集落遺跡からは、畿内系及び東海西部系土器が少量ながらも出土し、その立地と併せて前時代からの一定の乖離が窺える。これらの外来系土器の展開と集落遺跡における占地変化の背景には、生産基盤の整備・獲得および水田経営の新技术を有する集団の存在と、地域社会の再編成が推定されている。

このような古墳時代前期集落遺跡は、北堀新田遺跡周辺に限ってみても、久下東遺跡(10)、北堀新田前遺跡(12)、七色塚遺跡(13)、下田遺跡(17)、地神遺跡(37)等があげられる。さらに西方の女堀川中流域に目を向けると、後張遺跡(26)、川越田遺跡(26)、東牧西分遺跡(27)、浅見境北遺跡(30)等が連なるように展開している。このうち後張遺跡は、古墳時代前期から中期にかけて中核的集落として知られている。

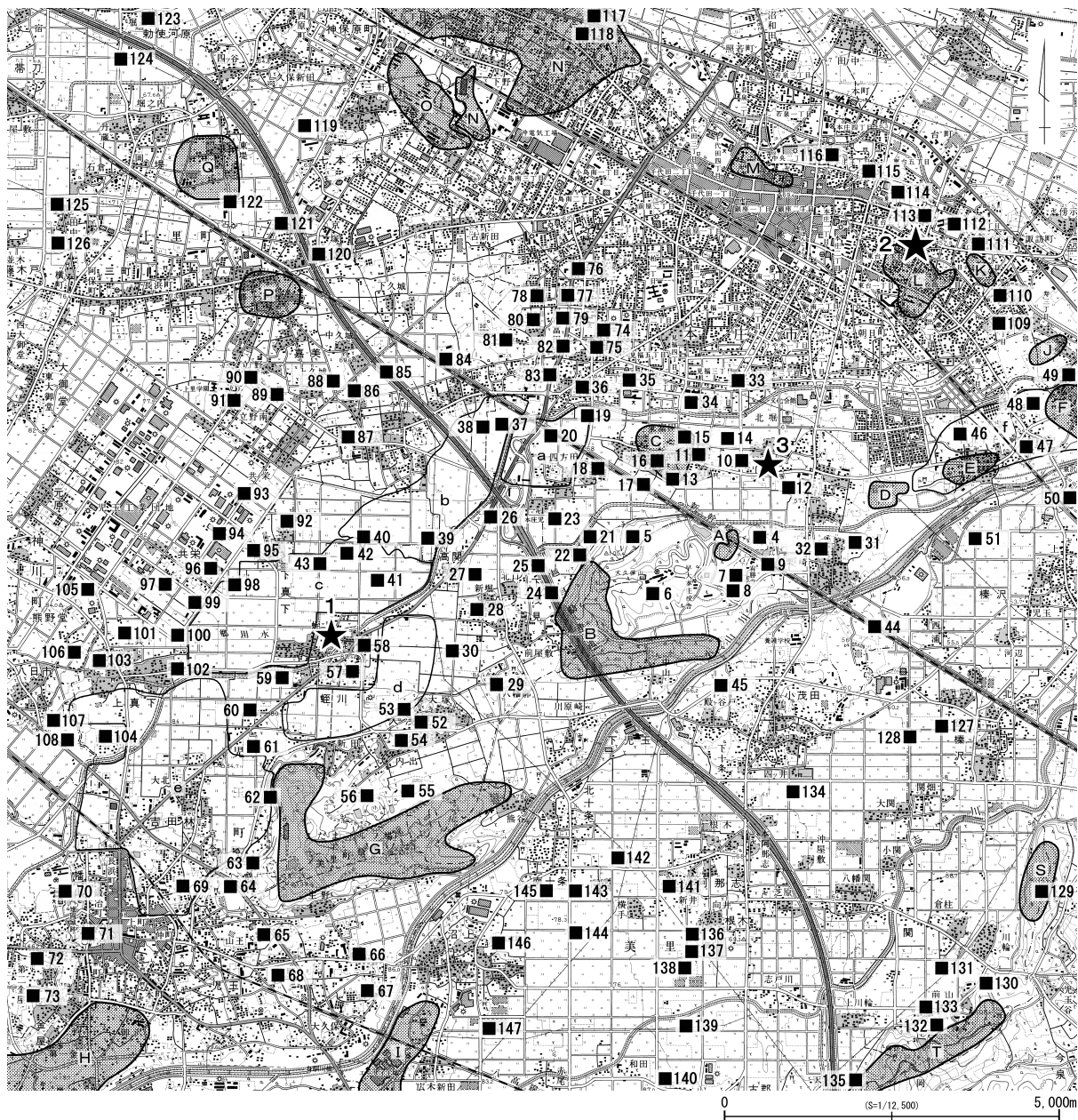
古墳時代中期の集落遺跡は、前期から継続・拡大するもののほかに、西富田新田遺跡(19)のように、女堀川左岸の微高地や台地内奥部および利根川右岸の低地を見下ろす本庄台地の段丘崖上に、新たに展開する集落が出現する。これらの集落遺跡には、九反田遺跡(20)、四方田遺跡(23)、笠ヶ谷戸遺跡(33)、雌濠遺跡(35)、弥藤次遺跡(78)、夏目遺跡(79)、夏目西遺跡(80)、本庄城跡(116)

等が知られ、一集落内における住居軒数も一段と増加している。また、これらの集落のなかには、夏目遺跡のように、鍛冶関連遺物や畿内系土器・朝鮮半島系土器を模倣した在地産土師器などが検出され、西日本方面との交渉または彼地からの一定集団の移住を想定しうる例も見られる。前代までは、ほぼ未開拓の状態であったと思われる台地内奥部への集落の進出は、これを可能とする新技術の獲得と、人口の増大とを背景としたものであったろう。

本庄台地、女堀川下流域および大久保山周辺における古墳時代後期を中心とする集落には、東谷遺跡（9）、山根遺跡（21）、東本庄遺跡（31）、今井川越田遺跡（39）、村後遺跡（45）、薬師元屋舗遺跡（75）、社具路遺跡（82）、小島本伝遺跡（117）などが知られる。これらの遺跡の多くは、古墳時代終末期から一部は奈良・平安時代へと連続している。これに対し中流域に目を向けると、集落の占地は低地内の自然堤防や微高地上を中心としている。前代から継続的に集落が営まれる後張遺跡（26）、川越田遺跡（26）の他に、左口遺跡（1）、飯玉東遺跡（25）、柿島遺跡（41）、藤塚遺跡（42）、共和小学校校庭遺跡（57）、辻堂遺跡（60）、南街道遺跡（61）、塚島遺跡（99）、辻ノ内遺跡（101）、また、後期から始まる集落大規模な集落として今井川越田遺跡（39）、金佐奈遺跡（104）が知られる。

上述したような集落遺跡の展開にあわせ、墳墓の築造も活発に行われている。周溝墓は、下野堂遺跡、浅見山Ⅰ遺跡（5）、北堀新田前遺跡（12）、飯玉東遺跡（25）、宥勝寺北裏遺跡（4）、村後遺跡（45）で検出されており、このうちの北堀新田前遺跡・村後遺跡においては前方後方形の周溝墓が確認されている。古墳は、埼玉県内最古級の前方後方墳である鷲山古墳（29）をはじめとして、全長70m以上の前方後円墳の前山1号墳（A）が前期に築かれ、続く中期に方墳の前山2号墳（A）、直径65mの中期大型円墳である公卿塚古墳（15）といった多様な墳形の古墳が丘陵上および微高地上に造営されている。本庄台地上には、八幡山古墳、三杵山古墳などを含む旭小島古墳群（N）が、また西方に目を転じると、児玉市街地の南側から児玉丘陵にかけて展開する長沖古墳群（H）といった県内有数の古墳群が知られている。なお、大久保山丘陵の北東斜面地には埴輪窯跡が所在しており、当地域においても埴輪生産の行われていたことが確認されている。

奈良時代になると、女堀川下流域の集落遺跡は激減し、わずかに七色塚遺跡（13）、社具路遺跡（82）を見るに限る。女堀川中流域における沖積低地内の自然堤防および微高地上の集落数は、やはり激減するものの熊野太神南遺跡（89）、八幡太神南遺跡（90）、立野南遺跡（91）、将監塚遺跡（93）、古井戸遺跡（94）、南共和遺跡（97）、真下境東遺跡（103）、真下境西遺跡（106）のように本庄台地南側の縁辺部に新たな集落が営まれるようになる。これらの遺跡の内、やや後出して設営される監塚遺跡・古井戸遺跡は長期的に継続するものであるが、その他の集落は平安時代に至ることなく終焉を迎えるものである。女堀川中流域のこのような集落の移動と消長の背景には、律令体制成立段階における条里制の展開が要因となっているものと考えられ、一定の政治的強制力をもとに計画的に集落が設営されたものと捉えられている。ここで小山側下流域右岸に目を向けると、深谷市熊野遺跡や中宿遺跡等が注目される。これらの遺跡は榎引台地北側の利根川およびその右岸に広がる低地を見下ろす段丘崖上に立地しているものである。これらの一連の遺跡は、7世紀後半代から新たに設営が始まるものであり、集落域のほかに官衙関連の遺構も確認されている。それでは、従前まで女堀川下流域を生活の地としていた人々は、いったいどこへ行ってしまったのであろうか。ここで本庄台地北側の縁辺部に目を向けることとしたい。近年報告書が刊行された「本庄城跡」においては、現在の本庄市庁舎の地

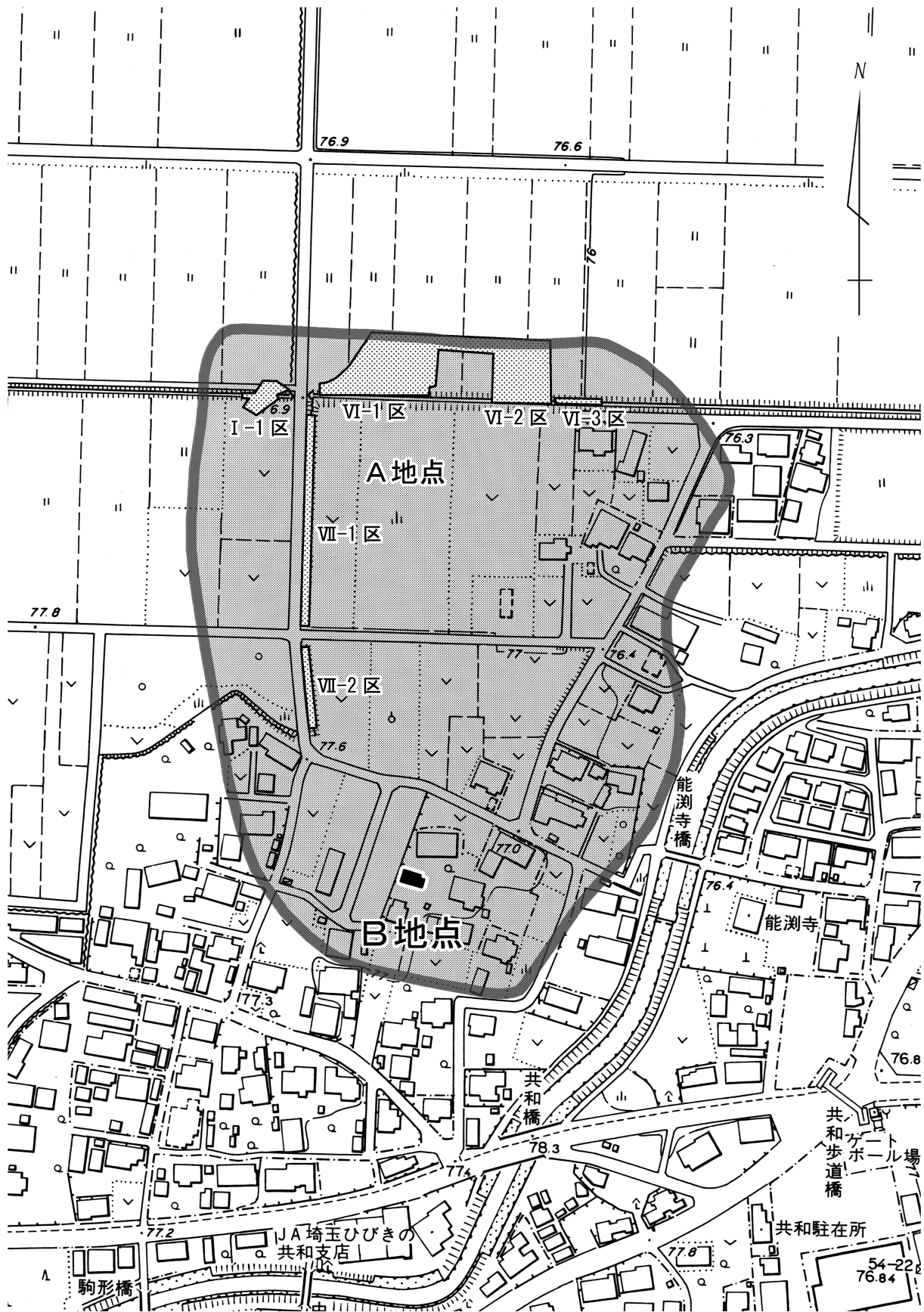


〈本庄市〉 1. 左口遺跡 2. 本庄飯玉遺跡 3. 北堀新田遺跡 4. 有勝寺裏埴輪窯跡・有勝寺北裏 5. 浅見山 I 6. 大久保山 7. 大久保山寺院跡 8. 東谷古墳 9. 東谷 10. 久下東 11. 北堀久下塚北 12. 北堀新田前 13. 七色塚 14. 北堀久下東北 15. 公卿塚古墳 16. 元富 17. 下田 18. 観音塚 19. 西富田新田 20. 九反田 21. 山根 22. 根田 23. 四方田 24. 雷電下 25. 飯玉東 26. 後張・川越田 27. 東牧西分 28. 関根氏館跡 29. 鷺山古墳・鷺山南 30. 浅見境北 31. 東本庄 32. 栗崎館跡 33. 笠ヶ谷戸 34. 伊丹堂前 35. 雌濠 36. 西富田本郷 37. 地神 38. 塔頭 39. 今井川越田 40. 前田甲 41. 柿島 42. 藤塚 43. 堀向 44. 古川端 〈美里町〉 45. 村後 〈本庄市〉 46. 田端屋敷 47. 台 48. 西五十子大塚 49. 東五十子赤坂 〈深谷市〉 50. 六反田 51. 大寄 〈本庄市〉 52. 新屋敷 53. 城の内 54. 金鑽神社古墳 55. 向田 56. 老丁田 57. 共和小学校校庭 58. 蛭川氏館跡 59. 蛭川坊田 60. 辻堂 61. 南街道 62. 吉田林割山 63. 阿知越 64. 御林下 65. 児玉清水 66. 下町古墳群 67. 大久保

第2図 周辺の主要な遺跡

68. 児玉大天白 69. 女池 70. 雉岡城 71. 八幡山 72. 金屋北原 73. 金屋西 74. 薬師 75. 薬師元屋
 舗 76. 二本松 77. 西富田 78. 弥藤次 79. 夏目 80. 夏目西 81. 西富田新田 82. 社具路 83. 社具
 路南 84. 今井諏訪 85. 久城前 86. 久城往来北 87. 今井原屋敷 〈上里町〉 88. 往来北 89. 熊野太神
 南 90. 八幡太神南 91. 立野南 〈本庄市〉 92. 将監塚東 93. 将監塚 94. 古井戸 95. 内手 96. 古井
 戸南 97. 南共和 98. 平塚 99. 塚畠 100. 新宮 101. 辻ノ内 102. 上真下東 103. 真下境東 104.
 金佐奈 〈神川町〉 105. 元屋敷 106. 真下境西 107. 八荒神南 108. 反り町 〈本庄市〉 109. 諏訪新田D
 110. 諏訪新田A～C 111. 御堂坂 112. 薬師堂東 113. 薬師堂 114. 天神林Ⅱ 115. 天神林 116. 本
 庄城址 117. 小島本伝 118. 元屋敷 〈上里町〉 119. 窪前 120. 本郷東 121. 愛宕 122. 愛宕耕地
 123. 耕安地B地点 124. 中堀 125. 田中西 126. 田中前 〈深谷市〉 127. 石蒔A 128. 石蒔B 129. 西
 山5号墳 〈美里町〉 130. 川輪聖天塚古墳 131. 石神 132. 長坂 133. 長坂聖天塚古墳 134. 日の森
 135. 諏訪山古墳 136. 向居 137. 勝丸稻荷神社古墳 138. 道灌山古墳 139. 志渡川遺跡・志渡川古墳
 140. 南志渡川 141. 堂山古墳 142. 十条条里 143. 新倉館跡 144. 烏森 145. 樋之口 146. 水殿瓦窯
 跡 147. 宮下
- A. 前山古墳群 B. 塚本山古墳群 C. 東富田古墳群 D. 西五十子古墳群 (西群) E. 西五十子古
 墳群 (東群) F. 東五十子古墳群 G. 生野山古墳群 H. 長沖古墳群 I. 広木大町古墳群 J. 鶴
 森古墳群 K. 御堂坂古墳群 L. 塚合古墳群 M. 北原古墳群 N. 旭・小島古墳群 O. 三田古墳群
 P. 本郷古墳群 Q. 東堤古墳群 R. 帯刀古墳群 S. 西山古墳群 T. 諏訪山古墳群
- a. 西富田・四方田条里 b. 今井条里 c. 児玉条里 (児玉北部地区) d. 児玉 (蛭川) 条里 e. 児
 玉条里 f. 五十子陣跡

下から検出された夥しい数の竪穴住居跡が報告され、古墳時代中期から平安時代に至る集落遺跡の一
 端が明かにされている。また近年増加し進展した試掘調査の成果からも、本庄台地北側の縁辺部は一
 定規模の集落遺跡の存在が予想されている。このような状況と上述した女堀川中流域と本庄台地南側
 縁辺部の状況および小山側右岸の熊野遺跡等の様子から、当該期の集落もまた、一定の計画性を持っ
 て本庄台地北側の縁辺部に移動し、平安時代に至るものと推定される。



第3図 左口遺跡位置図

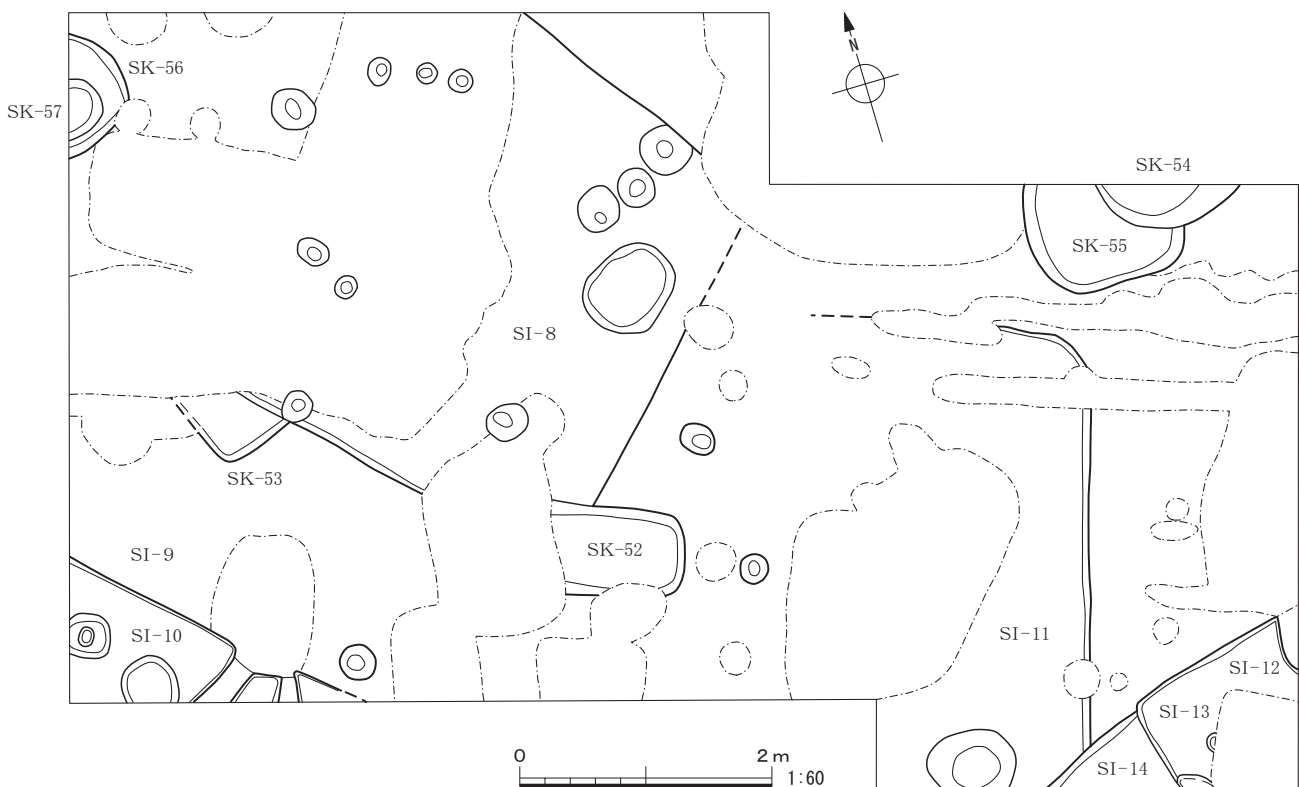
第Ⅲ章 左口遺跡B地点の調査

第1節 遺跡の概要

左口遺跡は、JR高崎線本庄駅より南西方向約4.7km、関越自動車道本庄児玉インターチェンジの南西方向約1.7km、JR八高線児玉駅より北東方向約2.1kmに位置している。この周辺は女堀川中流域に相当し、本庄台地と生野山丘陵に挟まれた、沖積低地帯中の微高地上に所在している。遺跡の範囲は、本報告地点の発掘調査に先立つ試掘調査によってその範囲が拡大することが明らかとなったため、変更増補が行われた。変更後の遺跡の規模は南北方向の最大幅約285m、北東から南西方向の最大幅約235mを測り、面積は約52,400㎡である。遺跡付近の標高はおよそ78.0mを測り、平坦な地形を呈している。

本遺跡は、昭和63年10月3日から平成元年1月17日にかけて、県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ町内遺跡群保存事業として（旧）児玉町教育委員会により発掘調査が実施され、古墳時代前期五領式期の方形周溝墓1基、古墳時代後期鬼高式期の竪穴住居跡3軒、時期不明の竪穴住居跡4軒の他、土坑51基、垣状遺構2列、溝状遺構39条、鍛冶状遺構1基が検出されている。（A地点（I-1区、VI-1・2・3区、VII-1・2区））。

今回報告する左口遺跡B地点は、A地点のうちのVI-1・2区の南側に位置している。両者間の距離はおよそ200mを測る。本遺跡からは、古墳時代後期、鬼高式期の竪穴住居跡7軒（第8～14号住居跡）、土坑6基（第52～57号土坑）が検出されている。



第4図 左口遺跡B地点全測図

第2節 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第8号住居跡（第4～6図、第1表、図版1・4）

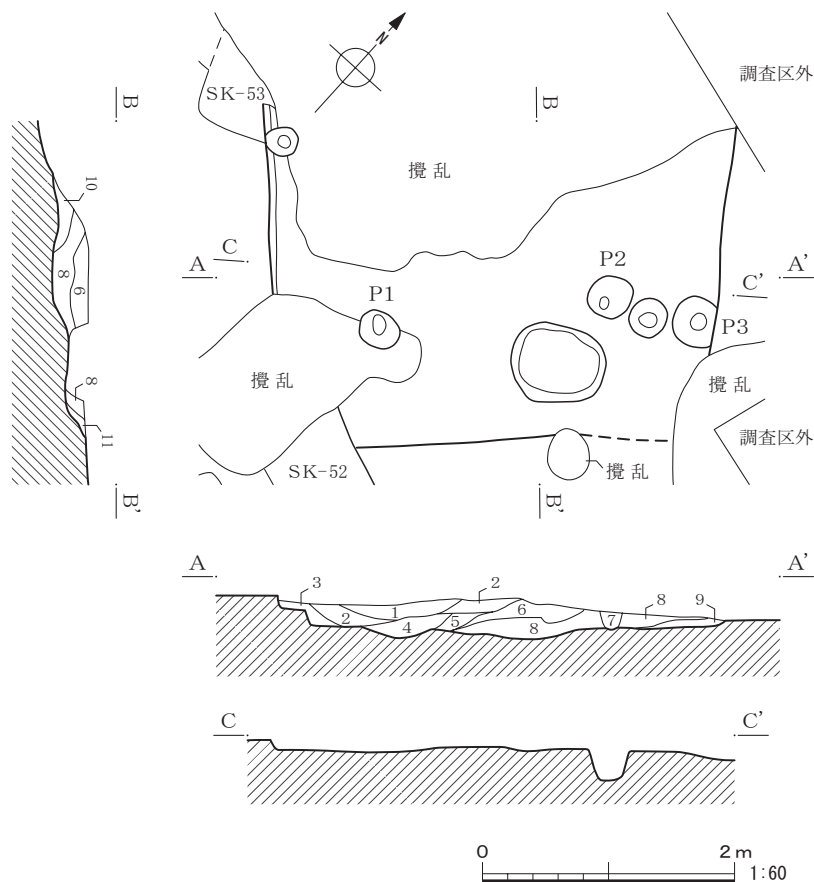
調査地点の中央、やや北寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第53号土坑を切って造られ、第52号土坑に切られている。

遺構確認面における平面形態は、住居北西側が大きく攪乱されているため明確にしえないが、北東および南西側の壁が、北西側にやや開く台形状を呈するものと考えられる。やや遺存状態のよい南西側の壁長は、遺存部分で1 m10cmを測り、南東側の遺存壁長は1 m57cm、北東側の遺存部壁長は1 m8 cmを測ることから判断すると、一辺が3 mをやや超える規模であったと考えられる。

壁溝は無く、また床面の貼り床は施されていない。支柱穴は、Pit 1・Pit 2が確認されたが、北西および南西部分は大規模な攪乱のため、確認されなかった。柱穴の規模は、Pit 1が長軸36cm、短軸34cm、深さ26cm、Pit 2が長軸38cm、短軸26cm、深さ34cmを測る。東隅部やや北寄りの壁際に掘られたピット（Pit 3）の底面から約10cm上からは、ほぼ完形の鬼高形の坏形土器が正位の状態で検出された。

カマド及び貯蔵穴は検出されなかったが、住居跡の遺存状態から、北西側壁に構築されていたものと考えられる。覆土は5層に分層され、いずれの層にも未風化の黄褐色粘質土粒子・小塊が含まれ、また堆積の角度から人為的かつ短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

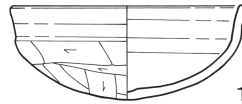
本住居跡は、出土遺物から古墳時代後期鬼高式期と考えられる。



第5図 第8号住居跡平面図・断面図

SI-8 土層説明

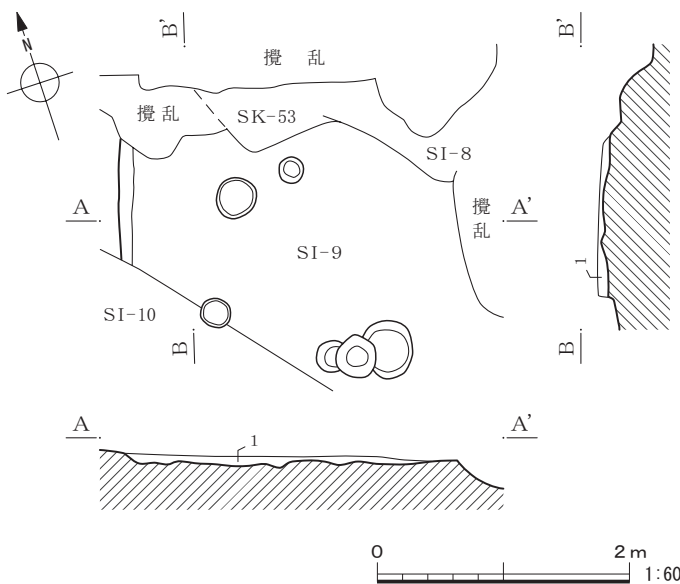
- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～5cm）を少量・黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>2 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～2cm）・黄褐色粘質土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>3 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～5cm）・黄褐色粘質土粒子（～8mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>4 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～8cm）・黄褐色粘質土粒子（～8mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>5 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまり軟らかく、粘性はやや高い。</p> <p>6 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～4cm）・黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量含む。しまり硬く、粘性は</p> | <p>やや高い。</p> <p>7 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～2cm）・黄褐色粘質土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>8 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～4cm）・黄褐色粘質土粒子（～5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。</p> <p>9 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～5cm）を多量に、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>10 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～3cm）を中量、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。</p> <p>11 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまり軟らかく、粘性はやや高い。</p> |
|--|---|



第6図 第8号住居跡出土遺物

第1表 第8号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径12.1。器高4.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 片岩・白色粒。含有物多い。E. 内外一橙色。F. 4/5。H. 貯蔵穴No.1。



SI-9 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～4cm）を少量、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。

第7図 第9号住居跡平面図・断面図

第9号住居跡（第4・7図、図版1）

調査地点の西側の南寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第8・10号住居跡、第53号土坑に切られている。

遺構確認面における平面形態は、上記の重複関係や攪乱のために住居西側の一部が遺存するにすぎないために明確にしえないが、この遺存部分が直線状をなすことから、方形を基調とするものと推定される。西側の壁長は、遺存部分で1 m65cmを測る。

本住居跡の床面は、確認されなかった。本址周辺の遺構確認面直上の土層は耕作土層であり、床面下の貼り床充填土層のみが確認された。また支柱穴及びカマド・貯蔵穴は確認されなかったため、住居西側の中央部分の一部が確認されたものと考えられる。

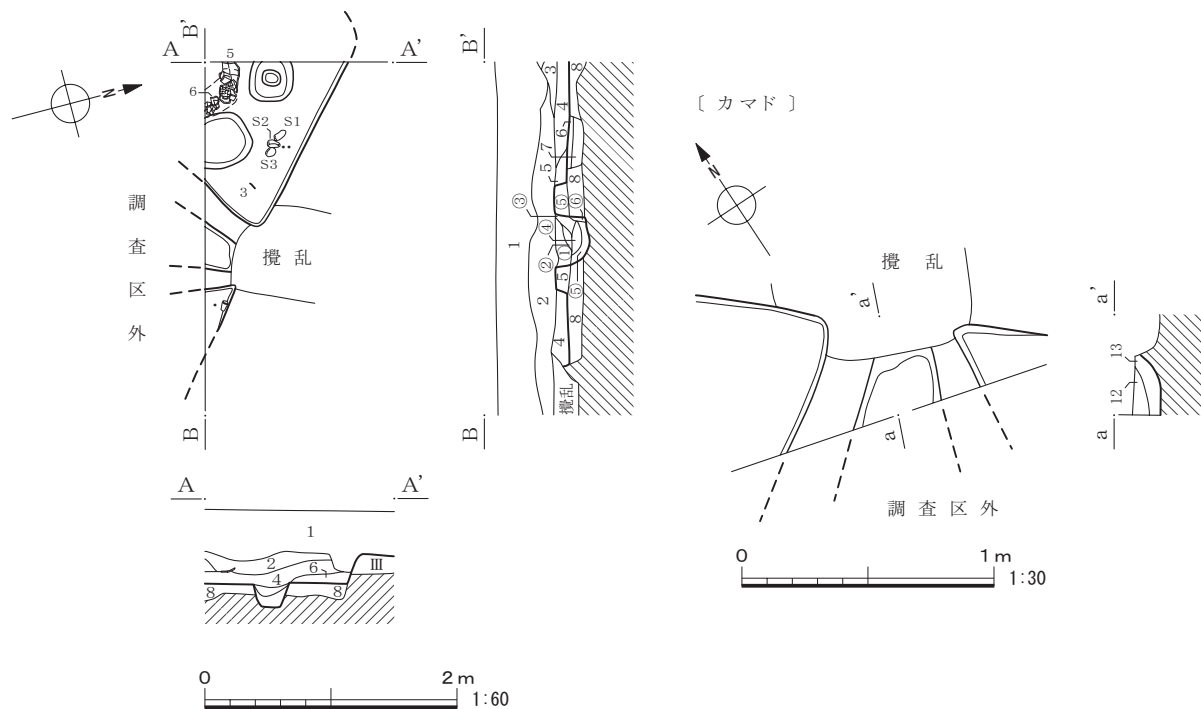
本住居跡は、第8号住居跡及び後述する第10号住居跡との切り合い関係から、古墳時代後期鬼高式期以前と考えられる。

第10号住居跡（第4・8・9図、第2表、図版1～2・4）

調査地点南西隅部で検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第9号住居跡を切って造られている。

遺構確認面における平面形態は、住居北東側の一部確認されたにすぎないために明確にしえないが、この確認部分が直線状をなすことから、方形を基調とするものと推定される。確認された北東側の壁長は、2 m40cmを測る。壁は直線状にやや角度をもって立ち上がる。

壁溝は無く、小塊状の黄褐色粘質土による貼り床がなされ、硬化した床面はほぼ平坦である。支柱穴は西壁にかかりPit 1が検出された。床面におけるPit 1の規模は、長軸40cm、短軸36cm、深さ26cmを測る。Pit 1の覆土は2層に分層され上層は、第4層に類するやや黒味を帯びる暗褐色粘質土層が、下層はやや黒味を帯びる暗褐色粘質土を少量含む黄褐色粘質土が観察された。



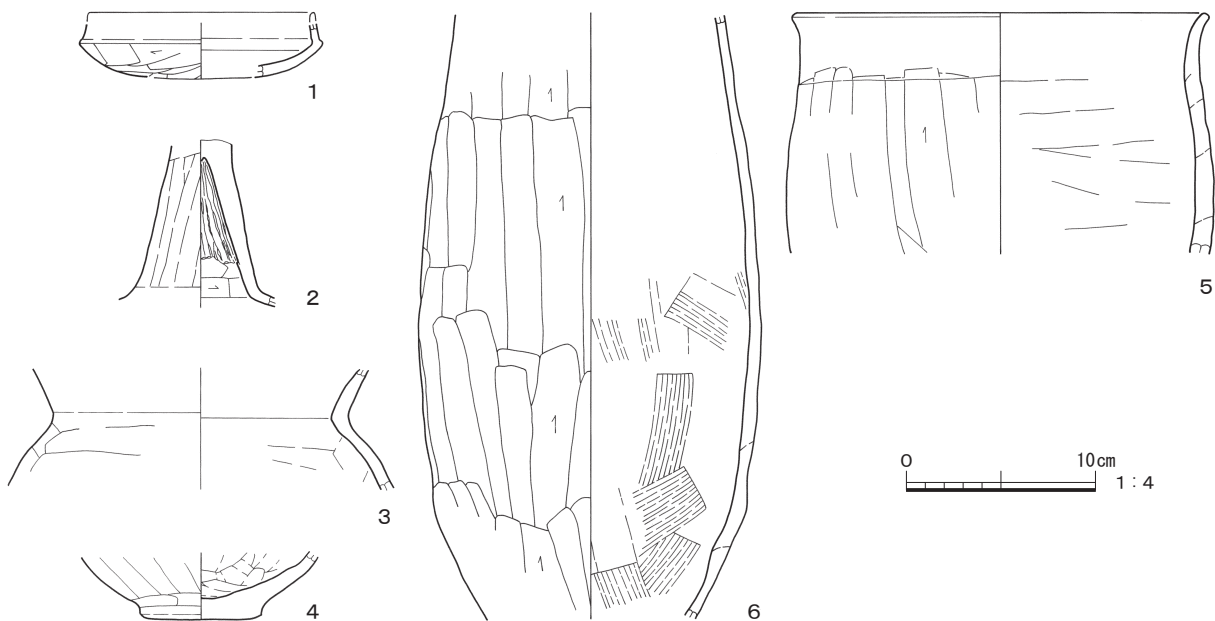
第8図 第10号住居跡平面図・断面図

SI-10 土層説明

- 1 灰褐色土 灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石(～1.5mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 2 暗灰褐色土 灰褐色土を主体とし、暗褐色粘質土粒子(～1mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 3 暗褐色土 灰褐色土を主体とし、暗褐色粘質土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 4 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～2mm)を中量、焼土粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 5 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～5mm)・粘土粒子(～1mm)を中量含む。しまり硬く、粘性はやや高い。
- 6 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊(～4cm)・黄褐色粘質土粒子(～5mm)を中量含む。しまり硬く、粘性はやや高い。
- 7 黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を主体とする。しまりはやや硬く、粘性は高い。
- 8 黄褐色粘質土 黄褐色粘質土小塊(～5cm)・黄褐色粘質土粒子(～5mm)を主体とし、暗褐色粘質土小塊(～2cm)を少量斑状に含む。しまり硬く、粘性は高い。貼り床。

SI-10 カマド 土層説明

- ① 明褐色粘質土 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子(～0.1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- ② 暗褐色粘質土 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子(～0.1mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- ③ 黄褐色粘質土 暗褐色土を主体とし、砂礫(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- ④ 暗褐色粘質土 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子(～0.1mm)を中量、砂礫(～1cm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- ⑤ 暗褐色粘質土 暗褐色土を主体とし、砂礫(～8mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- ⑥ 暗赤色粘質土 焼土粒子を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。



第9図 第10号住居跡出土遺物

第2表 第10号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 残存高2.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. 内外-にぶい褐色。F. 体部破片。H. 覆土。
2	土師器 高坏	A. 残存高8.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、脚部タテナデ。裾部ヨコナデ。内面、脚部絞り目→下端ヨコケズリ。裾部ヨコナデ。D. 白色粒・黒色粒。含有物少ない。E. 内外-明赤褐色。F. 脚部。H. No.4。
3	土師器 甕	A. 底径(6.4)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、胴部上位ヨコケズリ、下位タテケズリ。底部ケズリ。内面、胴部～底部ヘラナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内-にぶい黄橙色。外-にぶい橙色。F. 胴部上位片、底部1/2。H. 覆土。
4	土師器 甕	A. 口径(21.4)。残存高12.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒。含有物少ない。E. 内-黒褐色。外-灰褐色。F. 口縁部～胴部上半片。H. No.1。(床面)
5	土師器 甕	A. 残存高32.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、胴部タテケズリ。内面、胴部木口状工具ナデ。D. 片岩・白色粒。E. 内-にぶい黄褐色。外-灰黄褐色。F. 胴部2/3。H. No.1・No.2・床面。

カマドは、北側壁付近の煙道部分と、袖の一部が検出された。確認された袖の平面形態は、両袖ともに直線状に開く「ハ」状を呈するものと考えられる。確認されたカマドの規模は左袖が58cm、右袖が30cm、煙道部幅35cmを測る。貯蔵穴は、カマド右袖のさらに右側の調査区外に構築されていたものと考えられる。

床下土坑は、住居北東側壁からは35cm程離れ、カマド左袖外側寄りに確認された。床面における平面形態、やや不整な円形を呈する。本土坑の規模は、最大径53cm、深さ13cmを測る。覆土は2層に分層され、上層が黄褐色粘質土小塊を主体とする貼り床状をなし、下層は少量の黄褐色粘質土小塊を含む暗褐色粘質土層が観察された。

本住居跡の覆土は、3層に分層された（第4～6層）。暗褐色粘質土を主体土とするものであり、いずれの層の堆積も水平基調をなすことから自然堆積と考えられる。

出土遺物は、調査区南西隅部付近、カマド左袖のさらに左側から胴張甕及び長胴甕が検出された（第8・9図 5・6）。いずれも床面において圧壊した状態で出土ものである。また、カマド左袖外側の北東壁寄りからは、編み物石と考えられる棒状の円礫が3点検出された。

本住居跡は、出土遺物から古墳時代後期鬼高式期と考えられる。

第11号住居跡（第4・10・11図、第3表、図版2・4）

調査地点東側の南寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第14号住居跡に切られている。また住居跡南西側の大半は耕作の影響を受け消失し、遺存状態は不良である。

遺構確認面における平面形態は、住居南東側壁から続き北東方向においてほぼ直角をなす北西壁が確認されることから、方形を基調とするものと考えられる。確認された南東側の壁長は、3m6cmを測る。壁溝は無く、貼り床は施されていない。支柱穴は攪乱及び調査範囲の関係から検出されなかった。

カマドは検出されず、後述する貯蔵穴との位置関係から南西壁に構築されたものと考えられる。

貯蔵穴は、住居南東隅部付近に検出された、床面における平面形態は、不整な円形状を呈する。やや孤状を呈する底面から続く壁は直線的に立ち上がる。規模は最大径72cm、床面からの深さ61cmを測る。

覆土は5層に分層された。いずれの層にも未風化の黄褐色粘質土粒子・小塊が含まれ、また堆積の角度から人為的かつ短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

本住居跡は、出土遺物から古墳時代和泉式期と考えられる。

第12号住居跡（第4・12・13図、第4表、図版3～4）

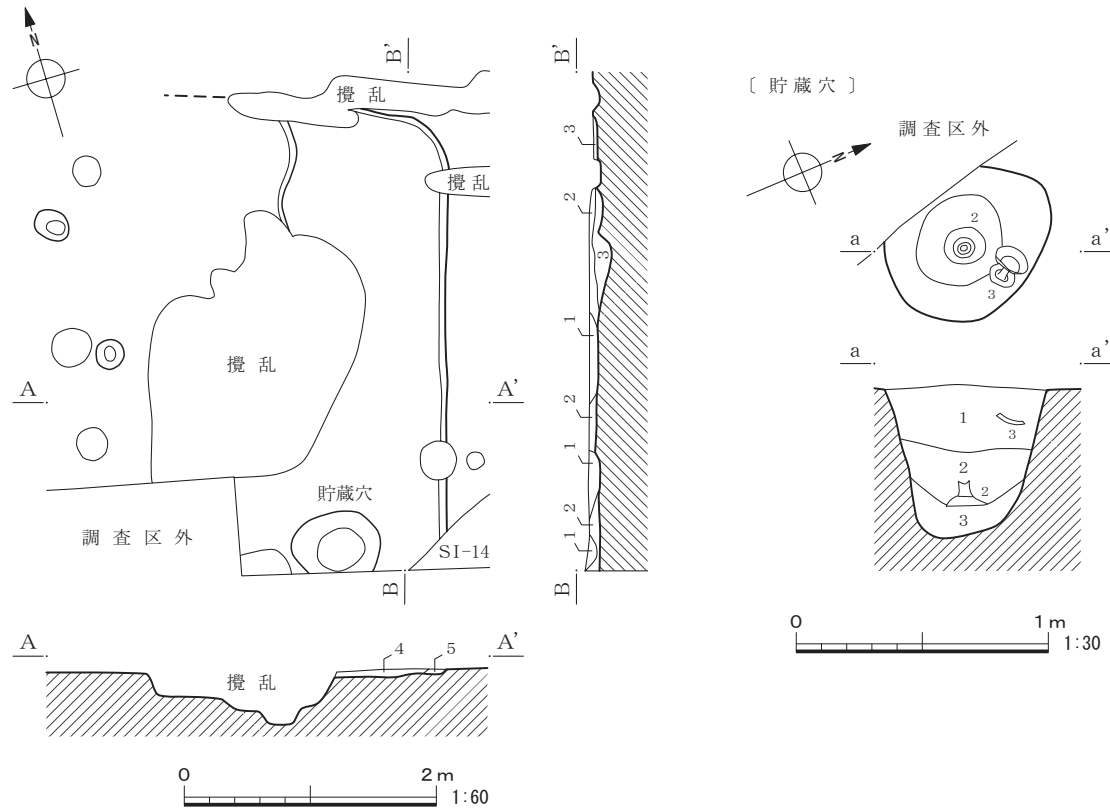
調査地点の南東隅部で検出した遺構である。住居北西遺隅部の一部が確認されその大半は調査区外へと続いている。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第13・14号住居跡を切って造られている。

遺構確認面における平面形態は、検出された2辺の壁がほぼ直角となることから方形を呈するものと考えられる。検出された北西側の壁長は、カマド袖部を含め1m53cmを測り、南西側の壁長は70cmを測る。

壁溝は南西側壁に一部確認され、また床面の貼り床は施されていない。支柱穴は検出されなかった。

カマドは左袖のみ検出され、その大半は貯蔵穴とともに北東方向の調査区外に構築されているものと考えられる。

本住居跡は、覆土から古墳時代の所産と考えられる。



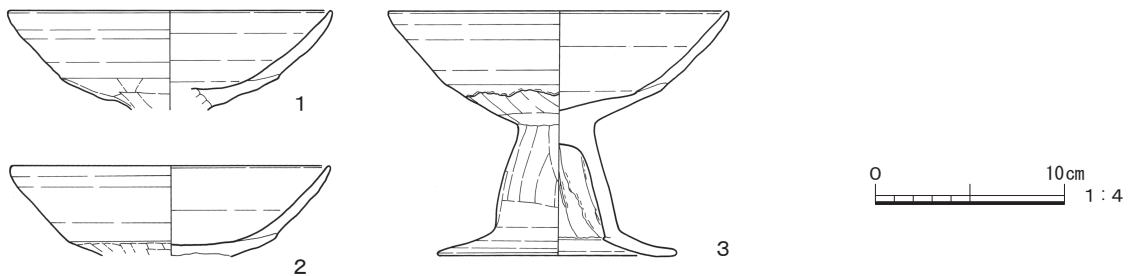
SI-11 土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～3cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。</p> <p>2 黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を主体とし、暗褐色粘質土小塊（～3cm）を少量斑状に含む。しまりは軟か硬く、粘性はやや高い。</p> <p>3 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。</p> | <p>4 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまりは硬く、粘性は高い。</p> <p>5 黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～5mm）を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。</p> |
|--|---|

SI-11 貯蔵穴 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量、炭化物粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。</p> <p>2 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を少量、炭化物粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。</p> | <p>3 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～2cm）・黄褐色粘質土粒子（～5mm）を中量含む。しまりは硬く、粘性は高い。</p> |
|---|--|

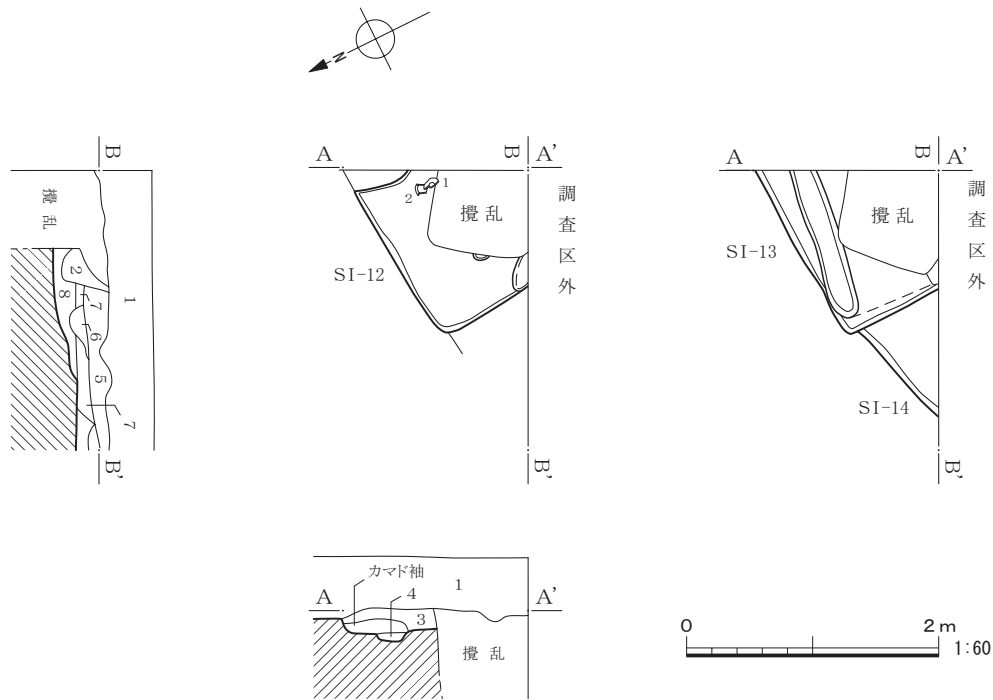
第10図 第11号住居跡平面図・断面図



第11図 第11号住居跡出土遺物

第3表 第11号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 高坏	A. 口径17.0。残存高5.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。坏部ヘラナデ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 坏部2/3。H. 貯蔵穴。
2	土師器 高坏	A. 口径16.8。残存高4.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。坏部ヘラナデ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 坏部。H. 貯蔵穴No.2。
3	土師器 高坏	A. 口径17.9。底径12.6。器高12.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。坏部ヘラナデ。脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面、坏部ヨコナデ。脚部タテナデ。裾部ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部1/6欠損。H. 貯蔵穴。



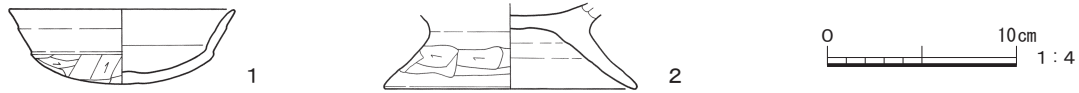
SI-12・13・14 土層説明

- | | |
|---|---|
| <p>1 灰褐色土 灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石(～1.5mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。</p> <p>2 明灰褐色土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊(～5cm)を微量、黄褐色粘質土粒子(～5mm)を中量、炭化物粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SI-12号覆土。</p> <p>3 暗灰褐色土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊(～5cm)・焼土小塊(～3cm)を少量、黄褐色粘質土粒子(～5mm)を中量、焼土粒子(～2mm)を少量、炭化物粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SI-12号覆土。</p> <p>4 暗灰褐色土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～5mm)・焼土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はや</p> | <p>や高い。SI-13壁溝覆土。</p> <p>5 暗灰褐色土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～5mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。</p> <p>6 暗灰褐色土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子(～5mm)を少量、焼土粒子(～2mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。</p> <p>7 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊(～1cm)・黄褐色粘質土粒子(～2mm)を少量、炭化物粒子(～1mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SI-14覆土。</p> <p>8 暗褐色粘質土 黄褐色粘質土を主体とし、暗褐色粘質土小塊(～1cm)・黄褐色粘質土粒子(～2mm)を少量斑状含む。しまりは硬く、粘性は高い。SI-14貼り床。</p> |
|---|---|

第12図 第12～14号住居跡平面図・断面図

第13号住居跡(第4・12図、図版3)

調査地点の南東隅部で検出した遺構である。住居北西隅部の一部が確認されその大半は調査区外へと続いている。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第12号住居跡に切られ、第14号住居跡を切って造られている。



第13図 第12号住居跡出土遺物

第4表 第12号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 杯	A. 口径(11.8)。器高3.8。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒。含有物少ない。E. 内-にぶい赤褐色。外-黒褐色。F. 1/3。H. 覆土。
2	土師器 台付甕	A. 底径13.1。残存高4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、台部ヨコナデ→ヨコケズリ。内面、台部ヨコナデ。D. 片岩・角閃石・白色粒。E. 内-黒褐色。外-明褐色。F. 台部2/3。H. No.1・覆土。

検出された北西側の壁長は、1 m25cmを測り、南西側の壁長は81cmを測る。

壁溝は北東側壁に確認され、また床面の貼り床は施されていない。支柱穴及びカマド・貯蔵穴は検出されなかった。本住居跡は、覆土から古墳時代の所産と考えられる。

第14号住居跡(第4・12図、図版3)

調査地点の南東隅部で検出した遺構である。住居北西遺隅部の一部が確認されその大半は調査区外へと続いている。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第12・13号住居跡によって切られている。

遺構確認面における平面形態は、検出された2辺の壁が直線状をなすことから方形を基調とするものと考えられる。検出された北西側の壁長は、1 m47cmを測る。小塊状の黄褐色粘質土による貼り床が施されている。本遺構は、検出された部位が狭小であるため、支柱穴及びカマド、貯蔵穴は検出されなかった。

本住居跡は、覆土から古墳時代の所産と考えられる。

2. 土坑

第52号土坑(第4・14図、図版3)

調査地点の中央西寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第8号住居跡によって切られ、遺構西側及び北側を攪乱によって消失し、遺存状態は不良である。

遺構確認面における平面形態は、長方形を呈するものと推定される。遺存する長軸の長さ53cm、短軸長36cm、遺構確認面からの深さ12cmを測る。

第53号土坑(第4・14図、図版3)

調査地点の中央南寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第8号住居跡を切り、遺構西側及び南側の一部を攪乱によって消失し、遺存状態はやや不良である。

遺構確認面における平面形態は、長方形を呈するものと考えられる。遺存する長軸の長さ1 m4 cm、短軸長72cm、遺構確認面からの深さ12cmを測る。

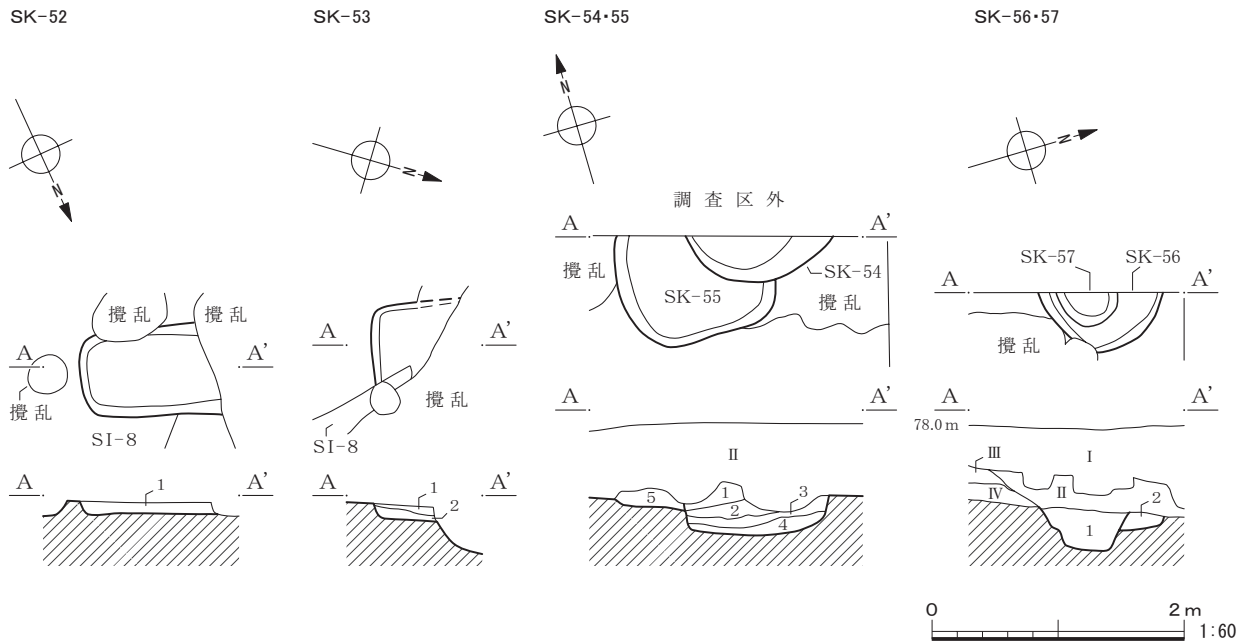
第54号土坑(第4・14図、図版3)

調査地点の北側壁東寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第55号土坑を切って造られている。

本地点調査区遺構確認面における平面形態は、半円形を呈する。調査区壁部分における幅は1 m15cm、調査区壁から南側への最大幅72cm、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

第55号土坑(第4・14図、図版3)

調査地点の北側壁東寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第54



SK-52 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～2cm）・黄褐色粘質土粒子（～2mm）を少量、炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

SK-53 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 灰褐色土を主体とし、浅間山系 A 軽石（～1.5mm）を多量に黄褐色粘質土小塊（～4cm）を少量、黄褐色粘質土粒子（～8mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 2 黄灰褐色土 黄褐色粘質土を主体とし、暗褐色粘質土小塊（～2cm）を中量斑状含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。

SK-54・55 土層説明

- 1 灰褐色土 灰褐色土を主体とし、浅間山系 A 軽石（～1.5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 2 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～2mm）を少量、炭化物粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SK-54 覆土。
- 3 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～1cm）・黄

褐色粘質土粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SK-54 覆土。

- 4 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～1cm）を少量、黄褐色粘質土粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SK-54 覆土。

- 5 明褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～5cm）を中量、黄褐色粘質土粒子（～5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SK-54 覆土。

- 6 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。SK-55 覆土。

SK-56 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～1cm）を微量、黄褐色粘質土粒子（～5mm）・焼土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

SK-57 土層説明

- 1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土小塊（～2cm）を少量、黄褐色粘質土粒子（～1mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

第 14 図 52～57号土坑平面図・断面図

号土坑によって切られている。本地点調査区遺構確認面における平面形態は、隅丸長形状を呈する。東西方向の幅は1m18cm、調査区壁から南側への最大幅98cm、遺構確認面からの深さ6cmを測る。

第56号土坑（第4・14図、図版3）

調査地点の北西隅部で検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第57号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、検出部分が狭小のため不明である。調査区西壁部分における幅は28cm、調査区壁から東側への最大幅40cm、遺構確認面からの深さ9cmを測る。

第57号土坑（第4・14図、図版3）

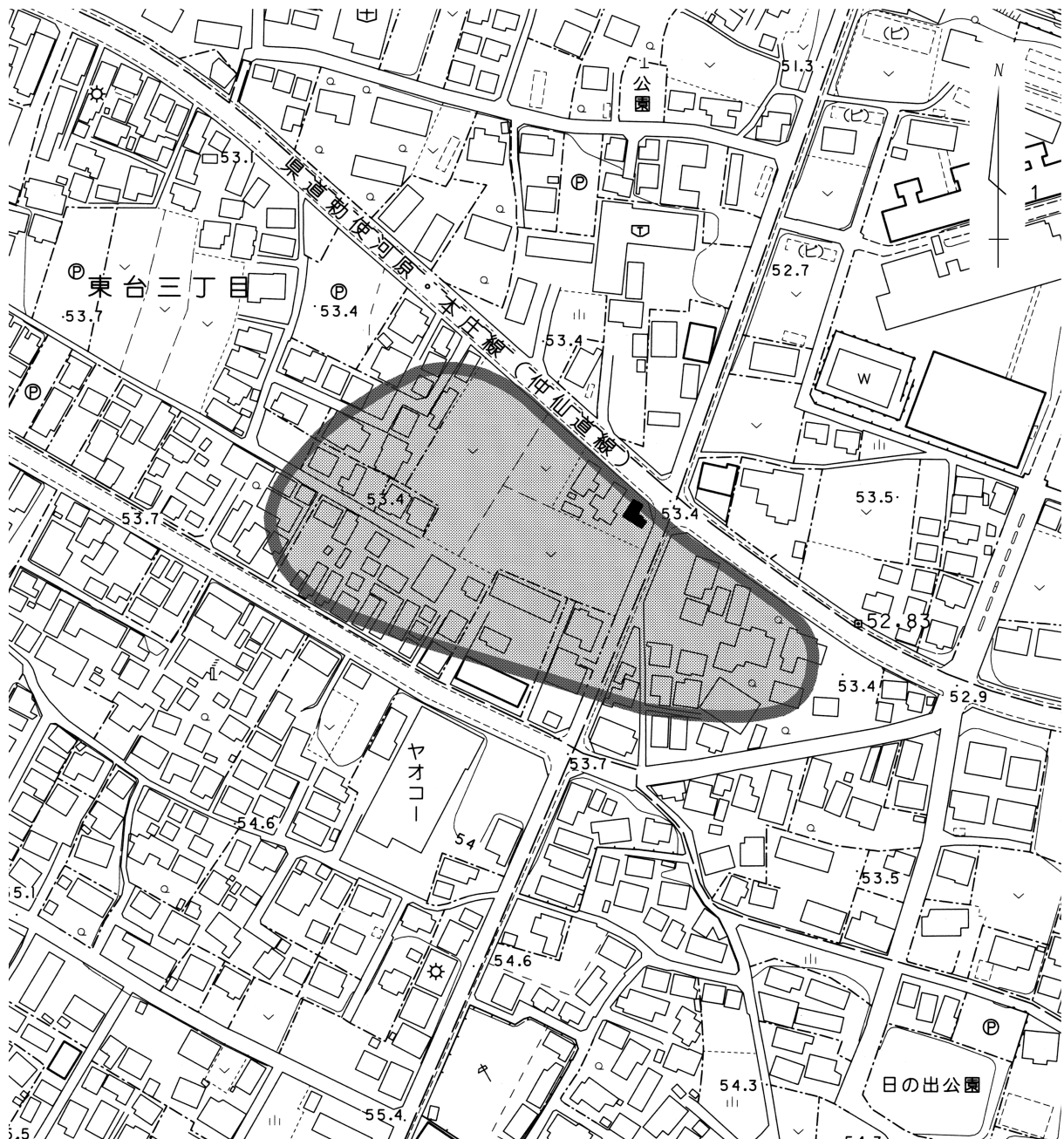
調査地点の北西隅部で検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色粘質土層上面である。第56号土坑を切られている。本地点調査区遺構確認面における平面形態は、半円形を呈するものと考えられる。調査区西壁部分における幅は72cm、調査区壁から東側への最大幅48cm、遺構確認面からの深さ32cmを測る。

第IV章 本庄飯玉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

本庄飯玉遺跡は、J R高崎線本庄駅より北東方向900mに位置し、本庄台地の北寄りの、台地面から低地へと移行する段丘崖上付近に占地している。段丘崖からの距離は約230mである。本遺跡の範囲は東西方向最大幅218m、南北方向最大幅109mを測り、面積は約16,100㎡である。遺跡付近の標高は53.4mを測り、平坦な地形となっている。

本書で報告する調査地点からは、古墳時代竪穴住居跡1軒（第3号住居跡）、平安時代竪穴住居跡2軒（第1～2号住居跡）、古代の所産と考えられる土坑6基が検出されている。



第15図 本庄飯玉遺跡位置図

第2節 検出された遺構と遺物

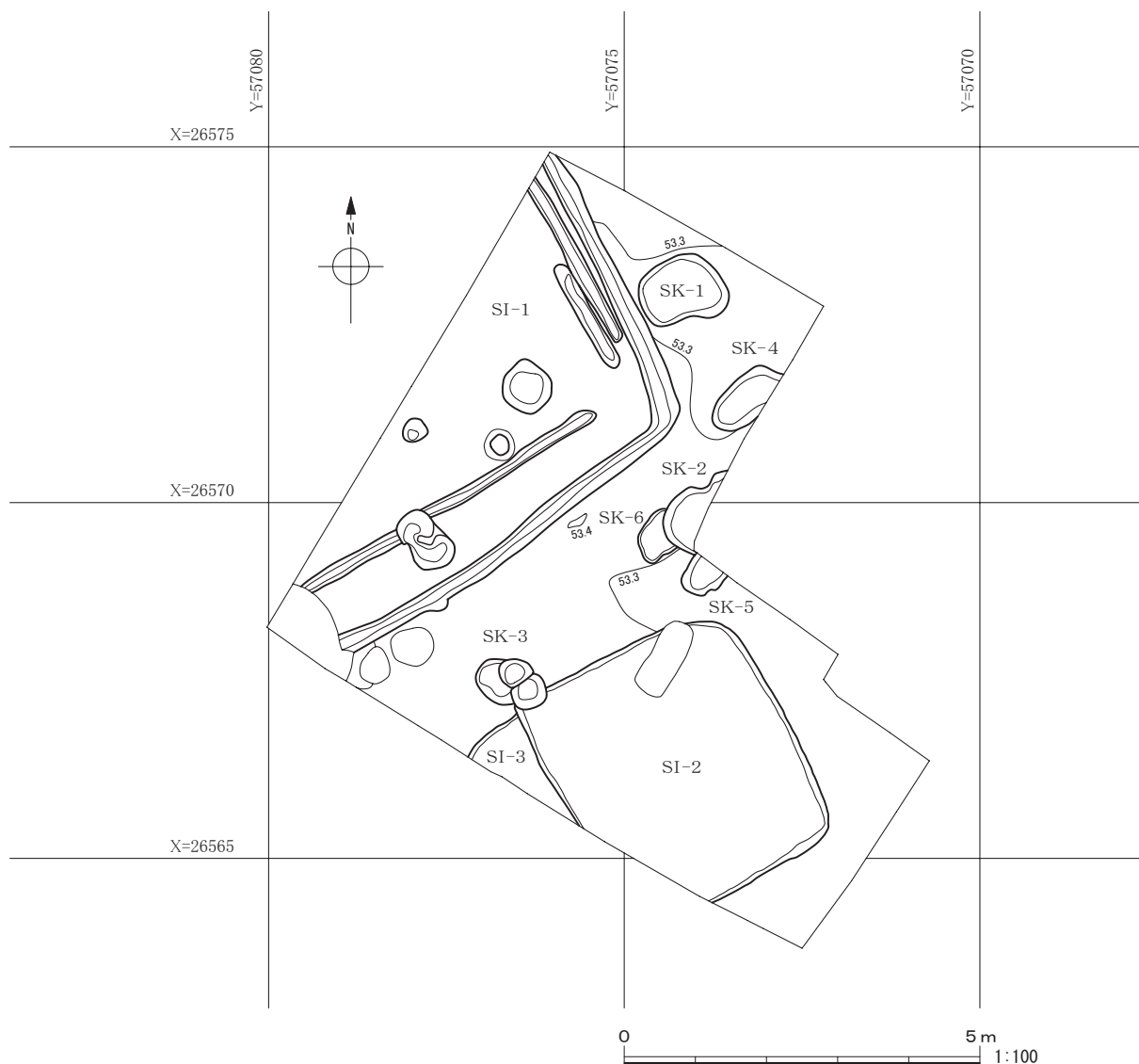
1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第16～18図、第5～6表、図版5～6・8）

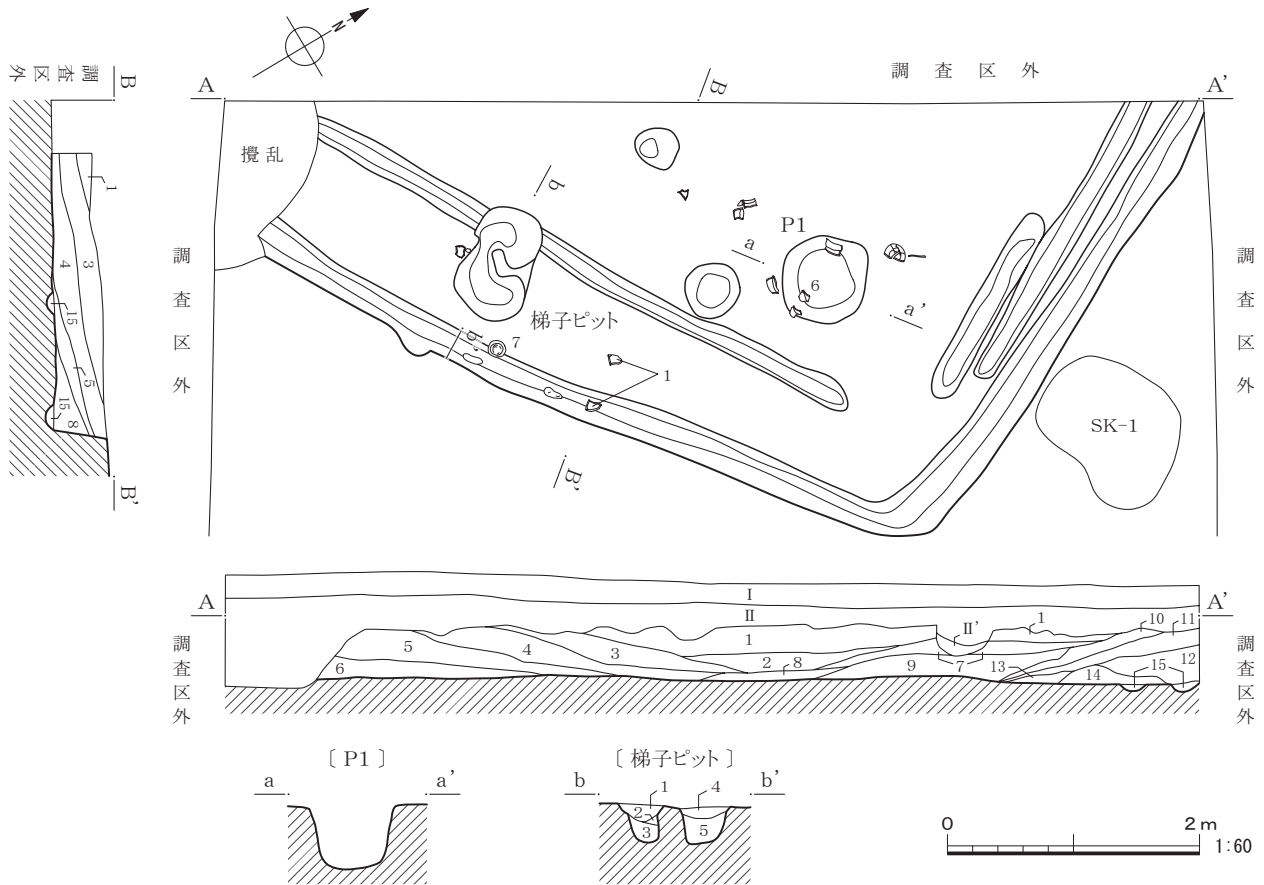
調査地点の中央西寄りから調査区西壁にかけて検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。他遺構との重複関係は無く、調査区南西隅部において一部攪乱を受けている。

遺構確認面における平面形態は、住居南東遺隅部の一部が確認されその大半は調査区外へと続いているため明確にしえないが、直線状をなす北東側の辺と南東側の辺が直角よりもやや開く角度をなすことから台形状を呈することが推定される。やや遺存状態のよい南東側の壁長は、遺存部分で5m86cm、北東側の検出壁長は4m8cmを測ることから判断すると、大規模な住居跡であったと考えられる。

壁溝を有し、また床面の貼り床は施されていない。南東壁から55～76cm内側にほぼ並行する壁溝が1条、北東側壁壁溝内側に接するように1条の壁溝が検出された。これら住居壁内側の壁溝は、土層観察から他住居の重複ではなく、本住居跡が拡張されたために埋め戻されたものと考えられる。支柱



第16図 本庄飯玉遺跡全測図



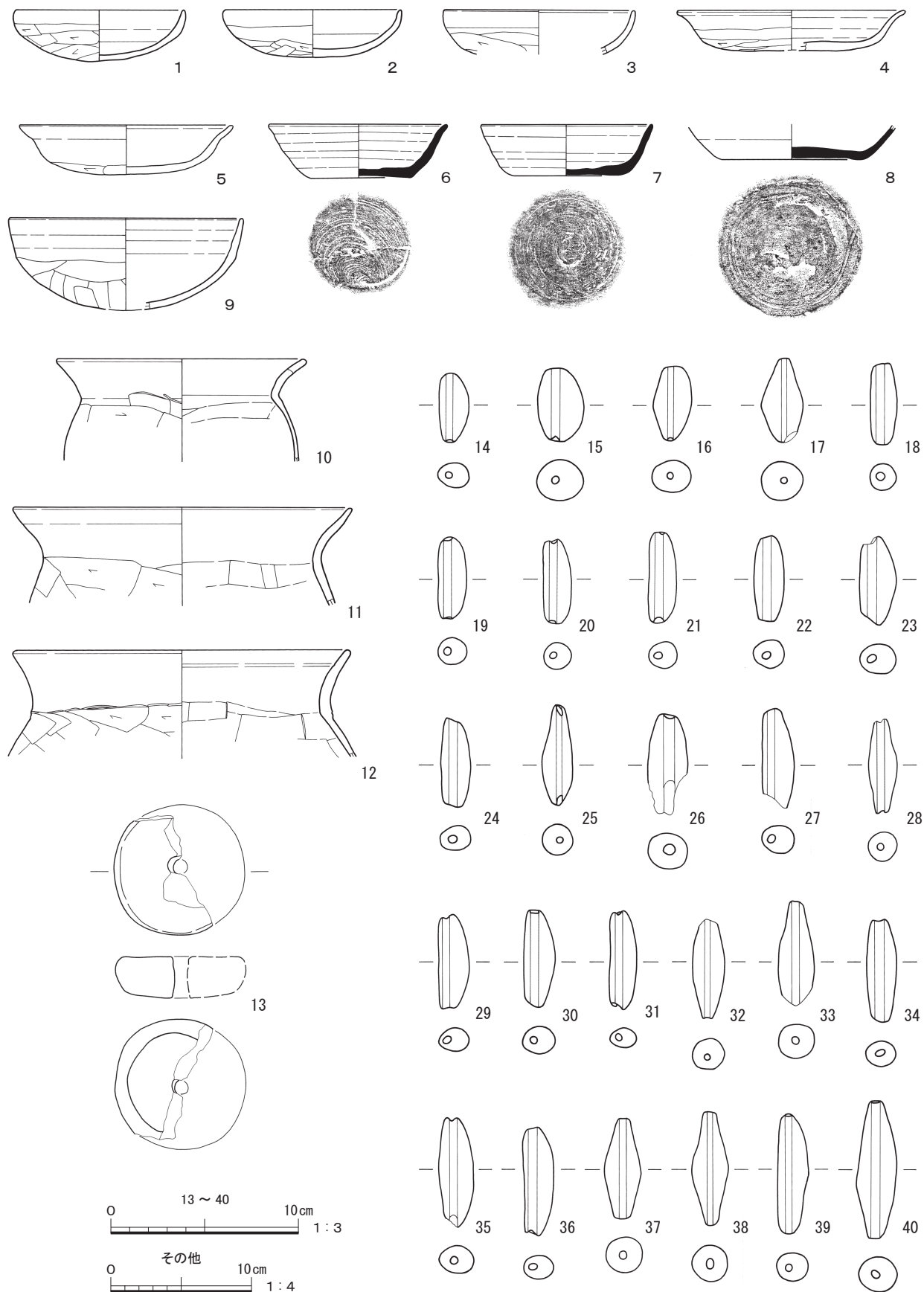
SI-1 土層説明

- | | | | |
|-----------|--|---------|---|
| I 整地層 | 砂利を主体とする。 | | |
| II 暗灰褐色土 | 暗褐色土を主体とし、浅間山系 A 軽石 (～2mm)・碎片状の土器片を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。 | 8 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子 (～0.1mm) を小塊状 (～2cm) に斑状に、ローム粒子 (～5mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| II' 暗灰褐色土 | 暗褐色土を主体とし、浅間山系 A 軽石 (～2mm) を多量に、暗褐色土小塊 (～1cm)・ローム小塊 (～1cm) 少量含む。しまりは軟らかく、粘性無し。 | 9 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム小塊 (～1.5cm) を多量に、ローム粒子 (～8mm)・焼土粒子 (～8mm)・炭化物粒子 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 1 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、碎片状の土器片・ローム小塊 (～1.5cm) を多量に、ローム粒子 (～8mm)・焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 10 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～2mm) を中量、焼土粒子 (～1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 2 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～2mm) を少量、焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 11 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～1mm) を少量、焼土・炭化物粒子 (～1mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 3 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム小塊 (～1.5cm)・ローム粒子 (～5mm)・焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 12 明褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～2mm) を中量、焼土粒子 (～1mm)・粘土粒子 (～0.1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 4 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム小塊 (～1cm)・ローム粒子 (～2mm) を中量、焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 13 明褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～2mm) を中量、焼土粒子 (～5mm)・粘土粒子 (～0.1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 5 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子 (～1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 14 明褐色土 | 暗褐色土を主体とし、粘土粒子 (～0.1mm) を多量に、ローム粒子 (～2mm)・焼土粒子 (～5mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 6 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～5mm) を少量、ローム小塊 (～1cm)・焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 15 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子 (～0.1mm) を中量、ローム粒子 (～5mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 7 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (～5mm) を少量、焼土粒子・炭化物粒子 (～2mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | | 壁周溝の埋没土。 |

SI-1・梯子ピット 土層説明

- | | | | |
|--------|--|--------|--|
| 1 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子 (～0.1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 4 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子 (～0.1mm) を中量、砂礫 (～1cm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 2 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、黒褐色粒子 (～0.1mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | 5 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、砂礫 (～8mm) を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 3 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、砂礫 (～8mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 | | |

第 17 図 第 1 号住居跡平面図・断面図



第18図 第1号住居跡出土遺物

第5表 第1号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	A. 量法 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径(12.0)。器高3.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/3。H. No.1。
2	土師器 坏	A. 口径(12.6)。器高3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ→下半ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/2。H. 覆土。
3	土師器 坏	A. 口径(13.6)。残存高3.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一にぶい橙色。F. 口縁部～体部1/6。H. 覆土。
4	土師器 坏	A. 口径(16.2)。器高3.3。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ→下半ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石。E. 内外一橙色。F. 1/4。H. 覆土、調査区一括。
5	土師器 坏	A. 口径(15.2)。器高3.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ→下半ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石。含有物少ない。E. 内外一にぶい橙色。F. 1/3。H. 覆土。
6	須恵器 坏	A. 口径12.6。底径7.2。器高3.8。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転糸切り。D. 石英・角閃石。E. 内外一灰白色。F. 4/5。G. 還元焰焼成。H. 覆土。
7	須恵器 坏	A. 口径12.0。底径7.4。器高3.7。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。D. 石英・白色粒。E. 内外一灰白色。F. ほぼ完形。G. 還元焰焼成。H. No.2。(床面)
8	須恵器 坏	A. 底径10.0。残存高2.5。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。D. 石英・白色粒。E. 内外一灰白色。F. 底部のみ。G. 還元焰焼成。H. SI-1 カクラン。
9	土師器 埴	A. 口径(16.4)。残存高6.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一橙色。F. 1/2。H. 覆土。
10	土師器 甕	A. 口径(17.5)。残存高7.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内一にぶい橙色。外一灰褐色。F. 口縁部～胴部上位2/3。H. 覆土。
11	土師器 甕	A. 口径(24.0)。残存高6.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一にぶい橙色。F. 口縁部～胴部上位1/3。H. 覆土。
12	土師器 甕	A. 口径(23.8)。残存高7.6。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内一にぶい橙色。外一橙色。F. 口縁部～胴部上位1/4。H. No.6。
13	土製紡錘車	A. 上面径(6.9)。下面径(5.3)。厚2.2。残重67.61g。C. 全面ナデ。D. 白色粒。E. 赤褐色。F. 1/2。g. 上・下面は側面と比べ平滑。H. 覆土。
14	土 錘	A. 長3.6。幅1.6。孔径0.4。重6.92g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. にぶい褐色。F. 完形。H. 覆土。
15	土 錘	A. 長3.7。幅2.4。孔径0.4。重15.38g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 黄灰色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
16	土 錘	A. 長3.9。幅2.0。孔径0.3。重12.63g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 明赤褐色。F. 完形。H. 覆土。
17	土 錘	A. 長4.4。幅2.2。孔径0.3。重15.08g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 黒色粒。E. にぶい橙色。F. 端部欠損。H. 覆土。
18	土 錘	A. 長4.3。幅1.4。孔径0.45。重8.55g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
19	土 錘	A. 長4.3。幅1.5。孔径0.4。重9.05g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒・赤色粒。E. にぶい褐色。F. 完形。H. 覆土。
20	土 錘	A. 長4.5。幅1.5。孔径0.4。重9.35g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒・赤色粒。E. にぶい褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
21	土 錘	A. 長4.8。幅1.5。孔径0.4。重9.33g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒・赤色粒。E. 褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
22	土 錘	A. 長4.5。幅1.6。孔径0.4。重10.42g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい黄褐色。F. 完形。H. 覆土。
23	土 錘	A. 長4.7。幅1.9。孔径0.5。重12.13g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい黄褐色。F. 端部欠損。H. 覆土。

第6表 第1号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	A. 量法 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
24	土 錘	A. 長4.6。幅1.6。孔径0.4。重8.96g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
25	土 錘	A. 長5.3。幅1.6。孔径0.3。重10.37g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい橙色。F. 両端部欠損。H. 覆土。
26	土 錘	A. 長5.3。幅2.1。孔径0.6。重14.78g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 灰黄色。F. 端部欠損。H. 覆土。
27	土 錘	A. 長5.2。幅1.7。孔径0.35。重11.37g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 橙色。F. 端部欠損。H. 覆土。
28	土 錘	A. 長5.0。幅1.5。孔径0.4。重8.37g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 褐灰色。F. 端部欠損。H. 覆土。
29	土 錘	A. 長5.0。幅1.6。孔径0.4。重9.55g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい褐色。F. 完形。H. 覆土。
30	土 錘	A. 長5.0。幅1.7。孔径0.45。重10.65g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
31	土 錘	A. 長5.2。幅1.4。孔径0.4。重7.18g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
32	土 錘	A. 長5.2。幅1.7。孔径0.3。重19.32g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. にぶい橙色。F. 端部欠損。H. 覆土。
33	土 錘	A. 長5.5。幅1.9。孔径0.4。重14.66g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 明赤褐色。F. 端部欠損。H. 覆土。
34	土 錘	A. 長5.4。幅1.6。孔径0.5。重10.54g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. にぶい橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
35	土 錘	A. 長5.7。幅1.8。孔径0.4。重13.73g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい橙色。F. 端部欠損。H. 覆土。
36	土 錘	A. 長5.7。幅1.6。孔径0.45。重10.89g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい橙色。F. ほぼ完形。H. 覆土。
37	土 錘	A. 長5.3。幅1.9。孔径0.4。重14.19g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土。
38	土 錘	A. 長5.9。幅1.9。孔径0.3。重16.12g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい橙色。F. 完形。H. 覆土。
39	土 錘	A. 長6.3。幅1.6。孔径0.35。重14.16g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土。
40	土 錘	A. 長7.2。幅2.0。孔径0.45。重25.30g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒。E. にぶい褐色。F. 完形。H. 覆土。

穴は、Pit1が確認された。柱穴の規模は、Pit1が長軸78cm、短軸70cm、深さ26cm、深さ50cmを測る。

カマドは検出されなかったものの、調査区北西壁における本址の土層観察においては北東壁寄りに焼土粒子及び粘土粒子を含む土層堆積が認められた。このことから、調査区外に延びる北東壁にカマドが構築されていたものと推定される。

覆土は14層に分層され、いずれの層にも未風化の黄褐色土粒子・小塊が含まれこと、また堆積の角度から比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。

出土遺物は、奈良時代真間式期から平安時代国分式期のものが出土し、時代幅を有するものの、梯子ピット付近の住居南東壁溝に落ち込むように、須恵器坏形土器(第18図No. 7)が逆位の状態で出土している。また覆土中からの出土ではあるものの27点の土錘が検出されている。これらの遺物は、利根側流域の低地を望む周辺地域における古代生業を考える上で特筆されよう。本住居跡は、出土遺物から平安時代国分式期と考えられる。

第2号住居跡（第16・19～20図、第7表、図版6・8）

調査地点の中央の東側から南西壁にかかり検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第3号住居跡を切って造られている。遺構確認面における平面形態は、南東方向から北西方向の辺がやや長い長方形を呈するものと考えられる。遺構の規模は、長辺の壁長は3 m65cm、短辺の壁長は3 m25cmを測り、遺構確認面から床面までの深さは10cm前後である。壁溝は無く、また床面は黄褐色土小塊を主体土とする貼り床が施されている。貼り床の掘り方は、隅部が特に深い傾向が観察された。床面の硬化は顕著ではなくかつ緩やかな起伏を有するものである。支柱穴、カマド及び貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は2層に分層され、いずれの層にも未風化の黄褐色粘質土粒子・小塊が含まれ、また上層土の堆積が比較的厚いことから人為的かつ短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

本住居跡は、貼り床土中からの出土遺物（第20図No. 3）から平安時代国分式期と考えられる。

第3号住居跡（第16・19・21図、第8表、図版6～8）

調査地点の南西壁中央で検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第2号住居跡よって切られている。遺構確認面における平面形態は、検出部分が狭小のため不明である。検出部分の壁長は94cmを測り、遺構確認面から床面までの深さは10cmである。重複関係にある第2号住居跡との位置関係から勘案すると方形基調の平面形態であった場合、一辺ないし短辺が4 mに満たない小規模な住居であることが予想される。壁溝は無く、また床面は黄褐色土小塊を主体土とする貼り床が施されている。カマド及び貯蔵穴は検出されなかったが、第2号住居跡との位置関係から、調査区外に続く南東壁側かあるいは北西壁側に構築されたものと推定される。

覆土は2層に分層され、いずれの層にも未風化の黄褐色粘質土粒子・小塊が含まれ、また上層土の堆積が比較的厚いことから人為的かつ短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

本住居跡は、床面上からの出土遺物（第21図No. 1）から古墳時代後期鬼高式期と考えられる。

2. 土坑**第1号土坑**（第16・22図、図版7）

調査地点の北東壁寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。他遺構との重複関係は無い。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形を呈する。長軸の長さ1 m17cm、短軸長84cm、遺構確認面からの深さ12cmを測る。

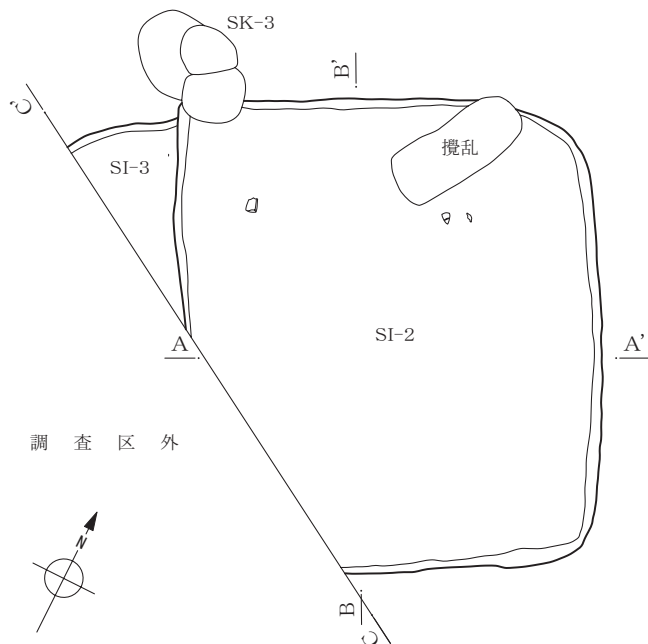
第2号土坑（第16・22図、図版7）

調査地点の北東側の壁寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第6号土坑を切り、第5号土坑に切られている。遺構確認面における平面形態は、不整形を呈する。調査区南西から北東方向壁際における長さ1 m27cm、調査区壁から南西方向の長さ56cm、遺構確認面からの深さ13cmを測る。

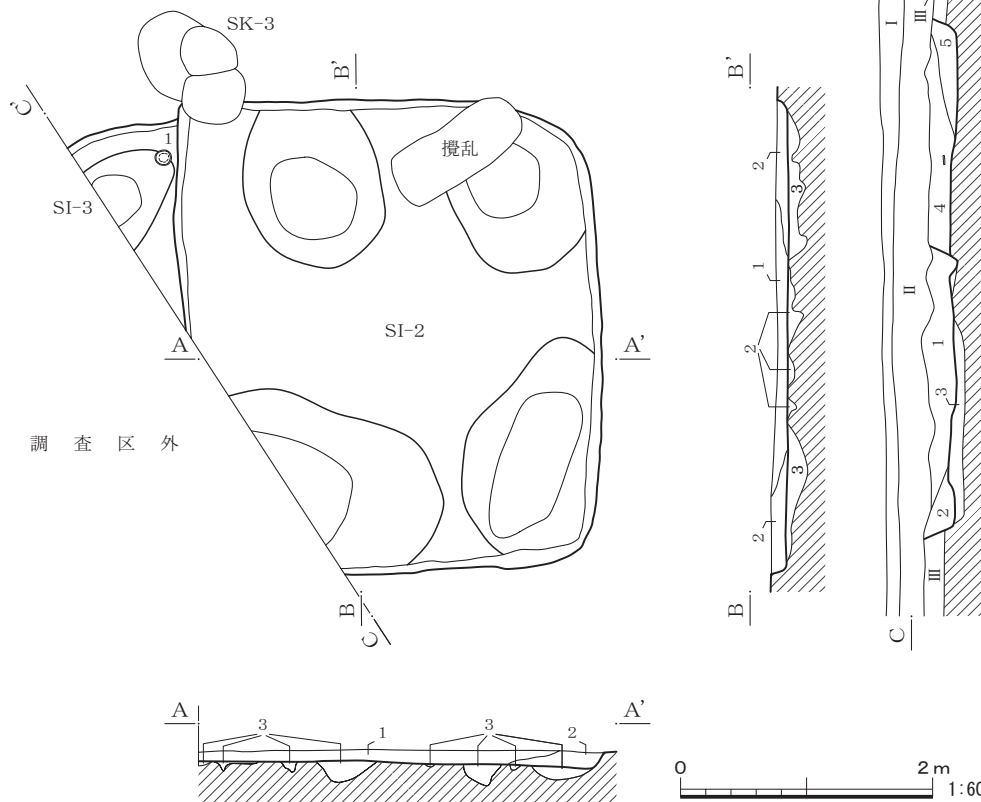
第3号土坑（第16・22図、図版7）

調査地点の中央南西壁寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。遺構確認面における平面形態は、不整な円形を呈する。長径の長さ72cm、短径60cm、遺構確認面からの深さ23cmを測る。

〔 SI-2 床面 〕



〔 掘り方 〕



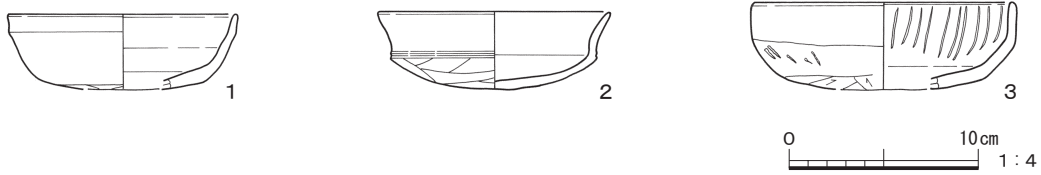
SI-2 土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。</p> <p>2 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1.5cm）を中量、ローム粒子（～5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性低い。</p> | <p>3 黄褐色土 黄褐色土ローム小塊（～5cm）を主体とし、暗褐色粒子（～1mm）を小塊状（～2cm）に中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。</p> |
|---|--|

SI-3 土層説明

- | | |
|---|---|
| <p>4 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。</p> | <p>5 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1.5cm）・ローム粒子（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。</p> |
|---|---|

第 19 図 第 2～3号住居跡平面図・断面図



第20図 第2号住居跡出土遺物

第7表 第2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径(11.8)。底径(8.3)。器高(3.9)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内-にぶい赤褐色。外-灰黄褐色。F. 1/3。H. 覆土。
2	土師器 坏	A. 口径(12.1)。器高4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒。含有物少ない。E. 内-暗灰色。外-にぶい黄橙色。F. 1/3。H. 覆土。
3	土師器 坏	A. 口径(13.6)。器高(3.6)。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ→下半ケズリ。内面、ヨコナデ。放射状暗文。D. 角閃石。含有物少ない。E. 内-黒色。外-にぶい橙色。F. 1/5。G. 内面黒色処理。H. 床下。



第21図 第3号住居跡出土遺物

第8表 第3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径11.1。器高4.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 黒色粒。E. 内-褐灰色。外-暗褐色。F. 口縁部一部欠損。H. No.1。

第4号土坑 (第16・22図、図版7)

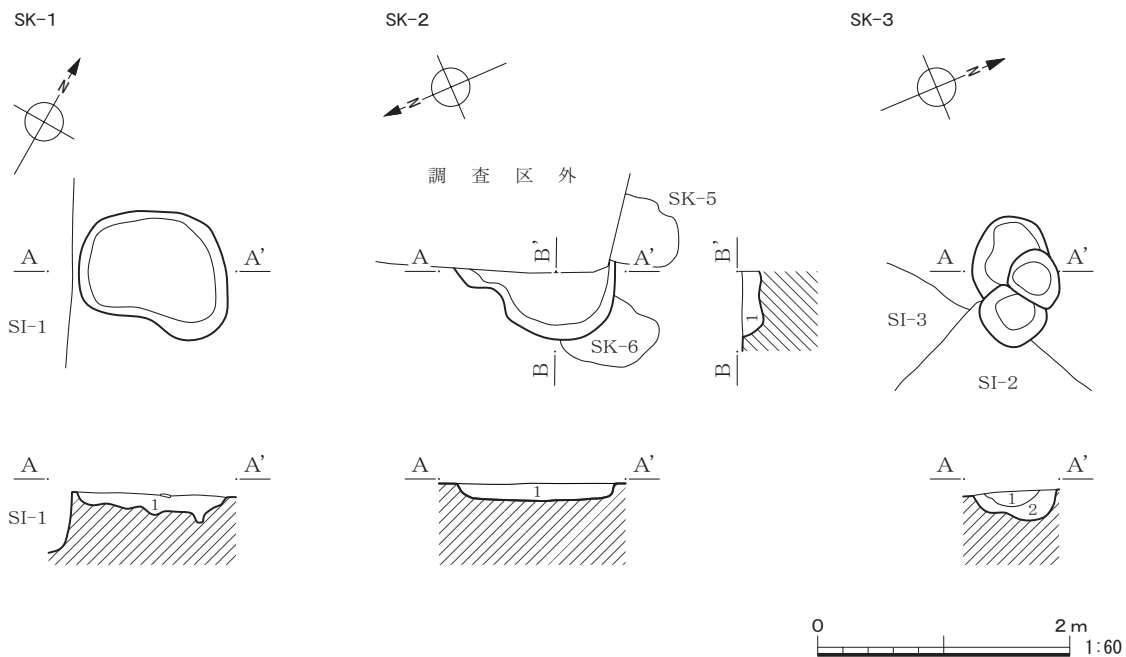
調査地点の中央南西壁寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。遺構確認面における平面形態は、不整な円形を呈する。長径の長さ72cm、短径60cm、遺構確認面からの深さ23cmを測る。

第5号土坑 (第16・22図)

調査地点の中央東寄りで検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第2号土坑を切って掘削されている。遺構確認面における平面形態は、不整な円形を呈する。検出部分における長径の長さ50cm、短径54cm、遺構確認面からの深さ23cmを測る。

第6号土坑 (第16・22図)

調査地点の中央、調査区の北東角部付近で検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第2号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、不整形を呈する。南西から北東方向の遺存長46cm、北西から南東方向の長さ56cm、遺構確認面からの深さ8cmを測る。



SK-1 土層説明

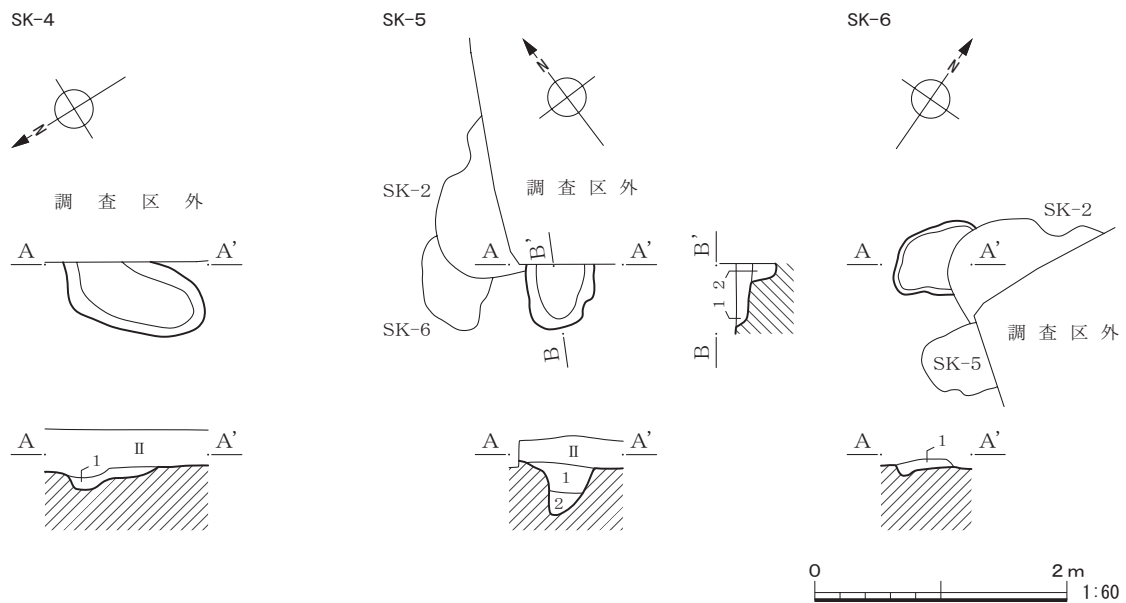
- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を小塊状（～8mm）に少量、焼土粒子（～4mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

SK-2 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・焼土粒子（～4

SK-3 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。
- 2 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～12cm）・ローム粒子（～8mm）を中量、焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。



SK-4 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1cm）を少量、ローム粒子（～2mm）・焼土粒子（～4mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

- 2 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

SK-6 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～2cm）を少量、ローム

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子・焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。

第 22 図 第 1～6号土坑平面図・断面図

第Ⅴ章 北堀新田遺跡D地点の調査

第1節 遺跡の概要

北堀新田遺跡は、JR高崎線本庄駅より南方向約1.6km、JR上越新幹線本庄早稲田駅の北東方向約600mに位置している。この周辺は、本庄台地南端部と大久保山丘陵の間の低地帯に相当し、本遺跡は北東方向に流下する男堀川・女堀川に挟まれた微高地上に所在している。遺跡の範囲は、東西方向283m、南北方向255mを測り、面積は約1,190㎡である。

北堀新田遺跡は、本報告発掘調査地点の道路を挟んだ東側隣地において、平成21年4月8日から同年4月28日にかけて、集合住宅建設に先立つ発掘調査が〔第23図 集合住宅調査地点〕、また本書所収調査地点の西方においては、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査が平成21年度から平成22年度にかけて本庄市教育委員会により実施され（北堀新田遺跡A1・2地点〔第23図 本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業調査区A1・A2地点〕、同B地点〔第23図 本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業B地点〕）、女堀川及び男堀川の下流域に形成された低地帯中の自然堤防上に営まれた、古墳時代から平安時代にかけて集落遺跡の一つとして知られている。

前述の集合住宅に先立つ発掘調査においては、平安時代前期の竪穴住居跡3軒、溝址2条、土坑8基が検出されている。またこれらの遺構からは、「上」・「中」・「十」と墨書された土師器・須恵器の坏形土器が出土している。この発掘調査の成果は、「北堀新田遺跡」（佐々木 藤雄、2010）によって報告されている。また後述した本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴うA1地点発掘調査においては、中世以降の土坑3基およびピットが「久下前遺跡Ⅲ（C1地点）・北堀新田遺跡Ⅱ（A1地点）・宥勝寺北裏遺跡Ⅲ（A1・B1地点）」（松本 完・的野 善行、2010）によって報告されている。

今回報告する北堀新田遺跡D地点は、平成21年度の集合住宅建設に先立つ発掘調査地点の西側16m、同21年度新都心地区発掘調査区（A1・A2地点）の東側32mに位置している。

本報告地点の周辺は平坦な地形であるが、南側の低地帯に向かい僅かではあるが標高を減じている。周辺の標高は、およそ60mである。

本書で報告する遺構は、平安時代竪穴住居跡1軒、再掘削を伴う溝址1条、土坑3基、ピット13基である。このうち本調査区において検出された再掘削を伴う溝址（SD-1）は、その走方向から前述の集合住宅に先立つ発掘調査において検出された第1号溝と同一のものと考えられるものである。

なお遺構番号については、先に記した北堀新田遺跡A2地点（第23図 本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業調査区A2地点）および同B地点（第23図 本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業B地点）の資料が現在整理調査中のため、通し番号の確定が困難な状況である。このため本報告においては将来の混乱を鑑み、各種の遺構に敢えて「1」からの番号を付した。

第2節 検出された遺構と遺物

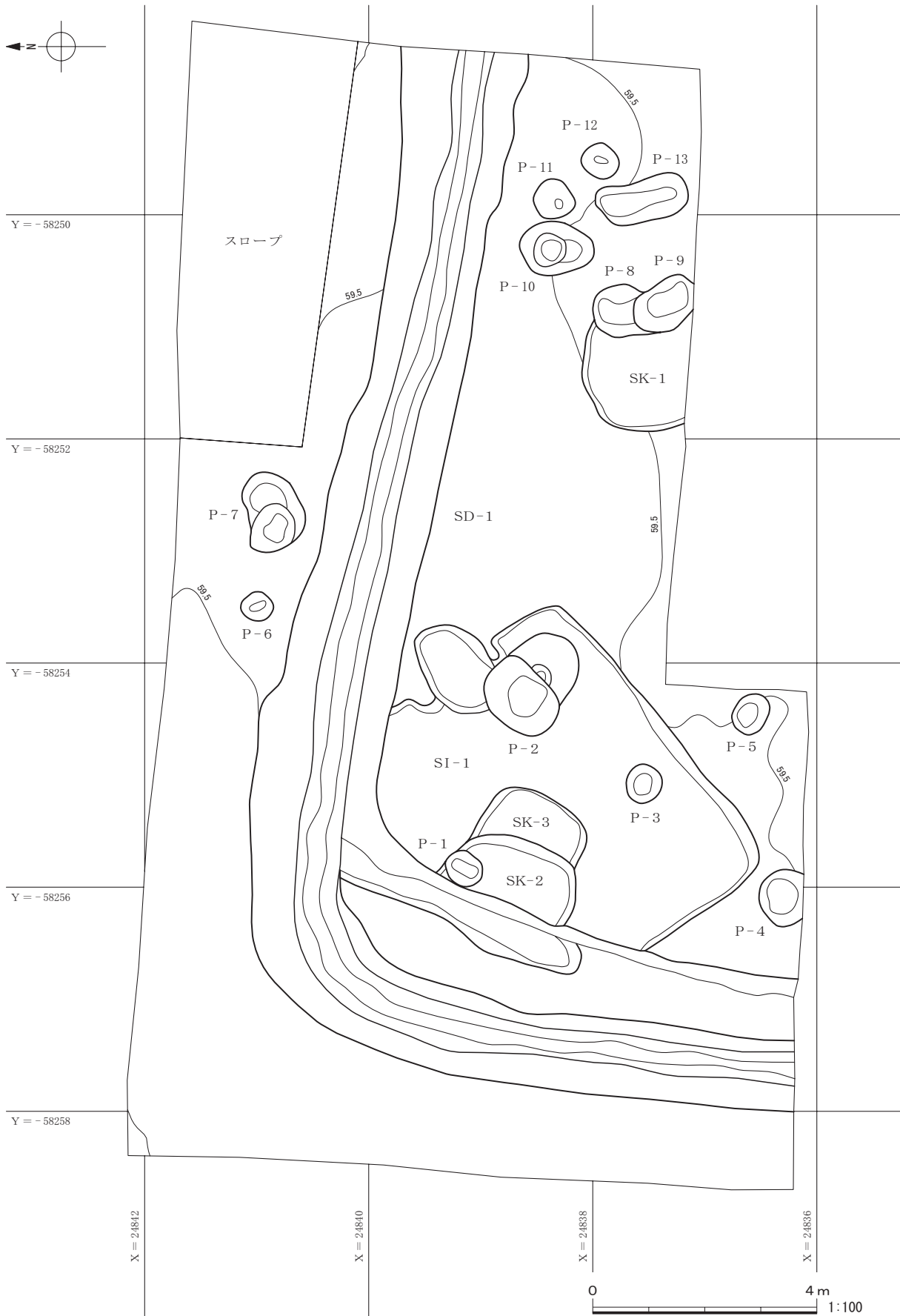
1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第24～27図、第9表、図版9～11）

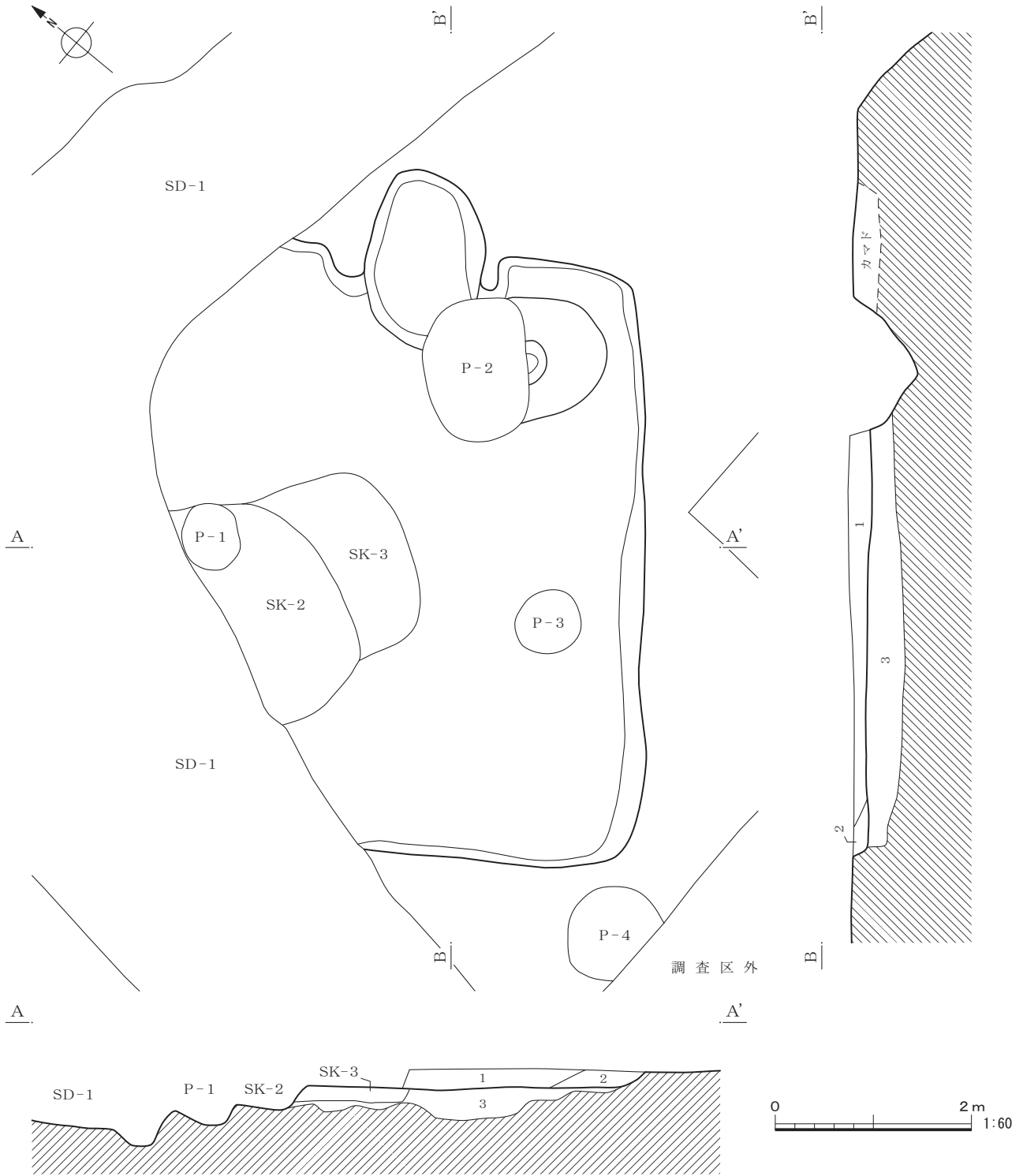
調査地点の中央の西寄りに検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。他遺構との重複関係は、第1号溝址、第2～3号土坑および第1～3号ピットに切られている。これらのうち



第 23 図 北堀新田遺跡位置図



第 24 図 北堀新田遺跡D地点全測図



SI-1 土層説明

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 1 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、焼土粒子・炭化物粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。 | 3 明褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（2cm）を多量に含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。貼り床。 |
| 2 明褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を多量含む。しまりは軟らかく、粘性低い。 | | |

第25図 第1号住居跡平面図・断面図

第2～3号土坑は、本住居覆土を掘削し埋没していることから遺構確認における認識は困難なものであり、本址を掘り下げる過程において検出されたものである。

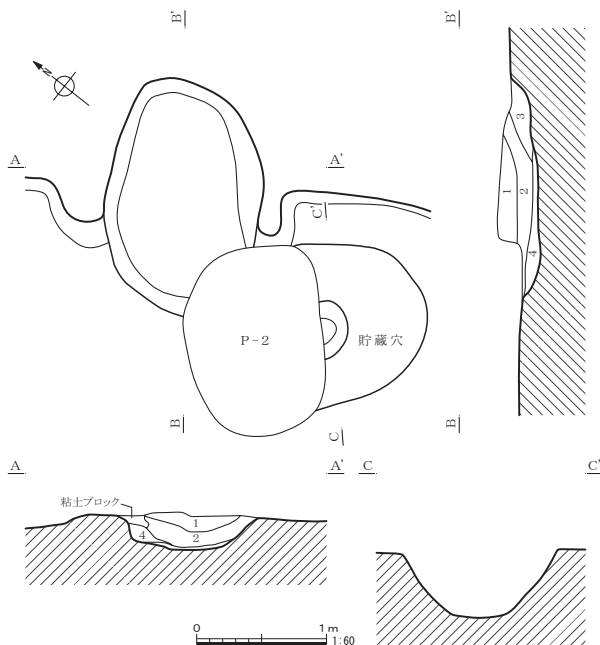
遺構確認面における平面形態は、方形状を基調とすることが推定される。遺存状態のよい南東側の壁長は、2 m92cm、南西側の遺存壁長は1 m30cmを測り、遺構確認面からの深さは14cmである。第

1号溝址部分との位置関係から判断すると、一辺が3m前後の小規模な住居跡であったと考えられる。

壁溝を有さず、また暗褐色土を主体土とした未風化の黄褐色土小塊を多量に含む床面の貼り床が施されている。床面の硬化は、カマド前面および住居中央部分に観察された。

カマドは、北東壁側に設けられている。第2号ピットの掘削により右袖前面および焚口部前面右側の一部が失われている。袖の平面形態は、両袖とも壁体から直線状にかつ並行して10cmほど延びている。燃烧部分は壁体から住居外へ張り出し、煙道部はやや狭くなっている。燃烧部底面は床面より一段下がるものの平坦である。焚口部分の幅は50cm、煙道部幅38cmを測り、楕円状を呈する燃烧部底面の長径は78cm、短径46cmを測る。

貯蔵穴はカマド右袖に接するように、かつ住居北東壁より16cmの距離を有して設けられている。カマドと同様に第2号ピットにより北西部分が失われている。遺存部分の平面形態は、楕円状を呈する。底面は平坦であり、壁はやや弧状を描くものの断面形態は逆台形状を呈する。北西から南東方向の長さは44cm、北東から南西方向の長さは66cmを測り、床面からの深さは28cmを測る。



本住居跡の覆土は、2層に分層された。共に暗褐色土を主体土とするものであり、自然埋没と考えられるものである。

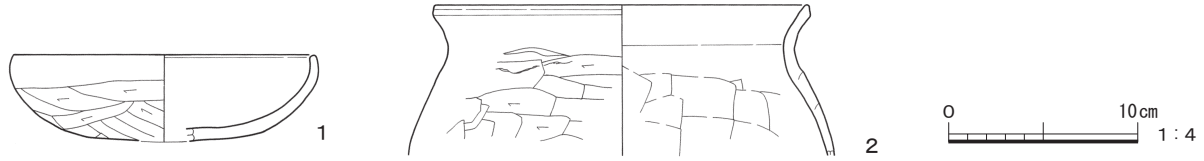
出土遺物は広口の土師器甕形土器（第27図 No. 2）が住居中央部分南西側壁より90cm付近の床面から出土している。

本住居跡の帰属時期は、覆土、燃烧部が住居壁より外側に突出するカマドの形態、および出土遺物から平安時代国分式期に求められよう。

SI-1 カマド 土層説明

- | | | | |
|---|--|---|---|
| 1 | 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黄褐色粘土粒子（～0.1mm）を中量、焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。 | 4 | 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を微量、粘土粒子（～1mm）・焼土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。 |
| 2 | 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土小塊（～1cm）・黄褐色粘土小塊（～2cm）を少量、粘土粒子（～8mm）・焼土粒子（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。 | 5 | 暗黄赤褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土粒子（～0.1mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。火床面。 |
| 3 | 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、粘土 | | |

第26図 第1号住居跡カマド・貯蔵穴平面図・断面図



第27図 第1号住居跡出土遺物

第9表 第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径(15.8)。残存高4.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一にぶい橙色。F. 1/2。H. 覆土。
2	土師器 甕	A. 口径(19.6)。残存高7.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 1/8。H. No. 1。

2. 溝址

第1号溝址 (第24・28・29図、第10表 図版10・11)

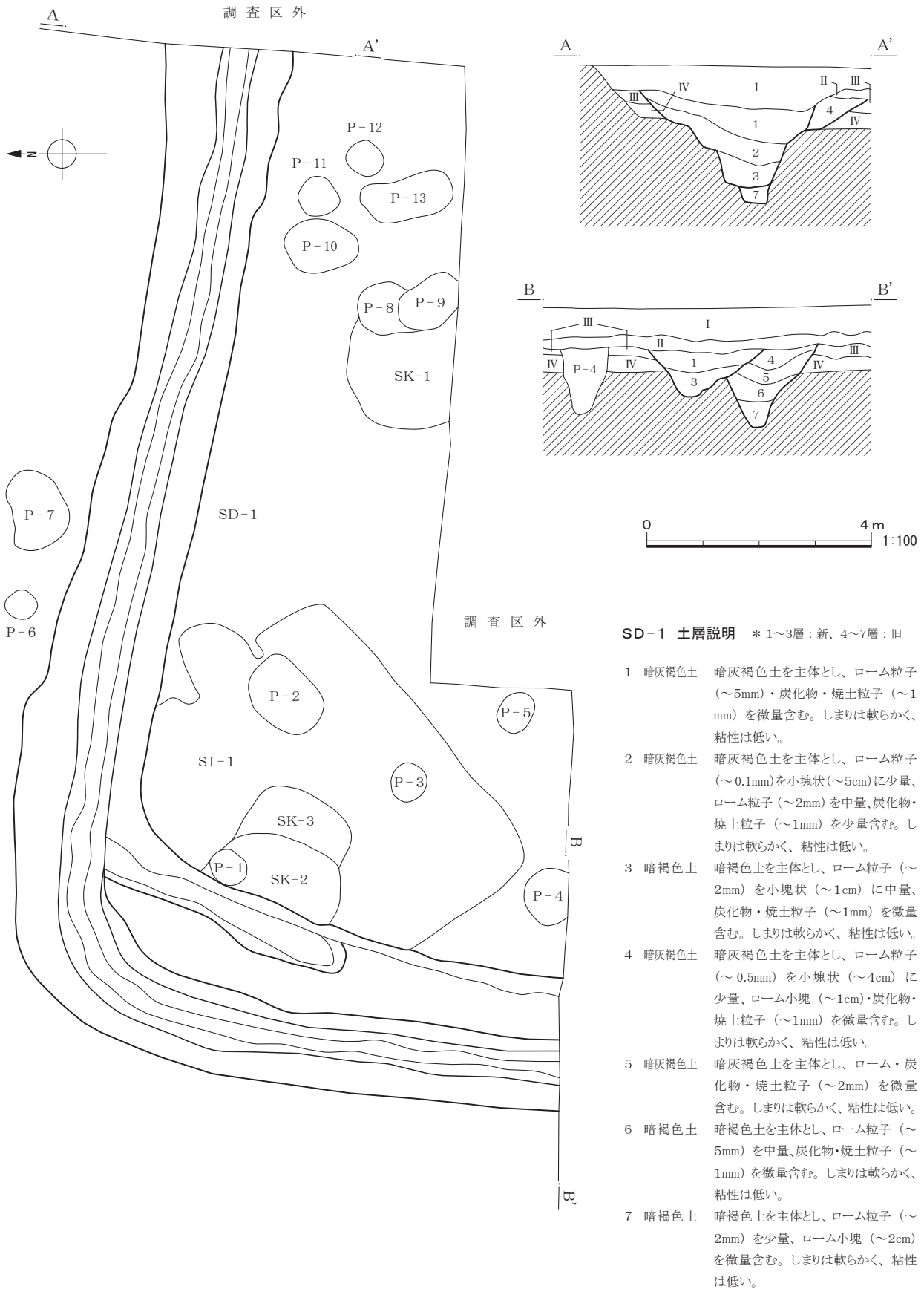
調査地点の東壁中央から西方向へ延び、西壁直前で南方に転じ南壁に亘り検出した遺構である。本調査区内において検出された長さはおよそ12mにおよぶものである。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。他遺構との重複関係は、第1号住居跡および第2号土坑を切って造られている。断面形態は「V」字に近いものの、底部に平坦面を有し、壁は直線状かつ斜位に立ち上がる所謂「箱薬研」状を呈する。

本遺構は、調査区西寄りにおける南北に軸を有する部分において、掘り返し時の“ズレ”を東西方向に生じている。新旧の関係は、西側のものが古く(第28図 B-B' 第4~7層。以下SD-1 aと呼称する。)、東側のものが再掘削されたもの(第28図 B-B' 第1・3層。以下SD-1 bと呼称する。)である。東西方向に軸を有する部分はその軌跡を一にするものの土層観察地点A-A'地点における第3層が再掘削時の、SD-1 bの底面に相当するものである。ここでこれらの溝址の底面標高について触れておきたい。土層観察地点A-A'地点におけるSD-1 aの底面標高は59.10mであり、SD-1 bの底面標高は59.23mである。土層観察地点B-B'地点におけるSD-1 aの底面標高は59.26mであり、SD-1 bの底面標高は59.53mである。このことから各溝址の比高差はSD-1 aが16cm、SD-1 bが30cmを測り、かつ共に土層観察地点B-B'地点から土層観察地点A-A'地点へと標高を減じているものである。さらに付け加えるならば、再掘削時の比高差がより大きなものとなっている点が注目される。両溝址共に底面付近の土層観察においては、砂粒の堆積といった積極的な流水の痕跡は観察されていない。このことから本址の掘削は、一義的においては空間を画する意識の下になされたものとして差支えなからう。しかしながら、前述した底面の比高差とその変化の背景には、降雨時の水捌けへの一定の配慮が看取されよう。

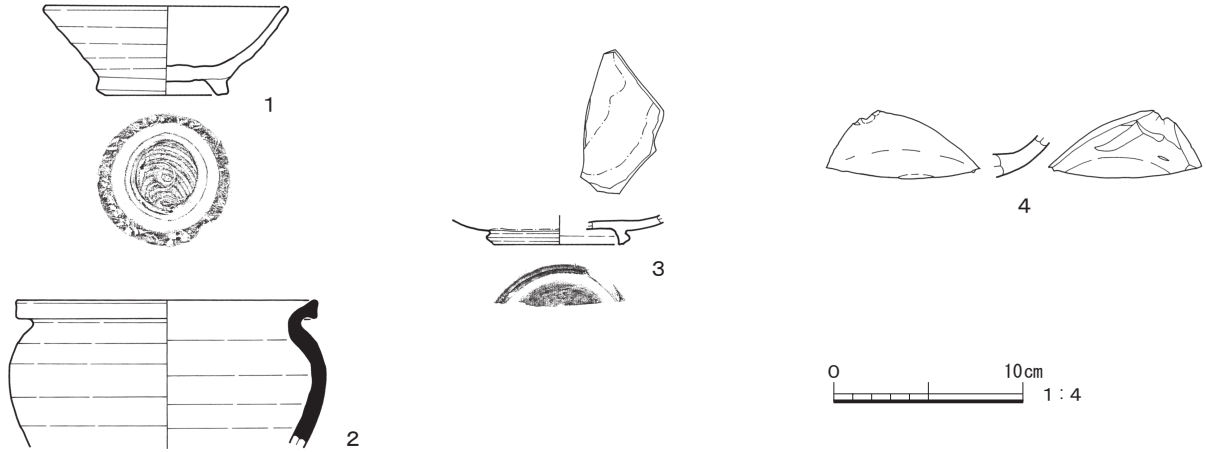
3. 土坑

第1号土坑 (第24・30・31図、図版10・11)

調査地点の東側、調査区南壁にかかり検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第8~9号ピットに切られている。遺構確認面における平面形態は、不整な方形状を呈するものと推



第 28 図 第 1 号溝址平面図・断面図



第29図 第1号溝址出土遺物

第10表 第1号溝址出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	須恵器 高台付碗	A. 口径(12.6)。底径5.9。器高4.6。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転糸切り→高台貼付。D. チャート。E. 内外-浅黄色。F. 口縁部3/4欠損。G. 酸化焰焼成気味。外底面に○印状のへら描き。高台底面全体にワラ状の圧痕。外口縁部に一部炭化物付着。H. 覆土。
2	須恵器 甕	A. 口径(15.8)。残存高7.7。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。D. 石英。含有物多い。E. 内外-灰色。F. 口縁部~胴部破片。G. 還元焰焼成。H. 覆土。
3	灰釉陶器 皿	A. 底径(6.8)。残存高1.5。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転へらケズリ→高台貼付。D. 黒色粒。E. 胎土-灰黄色。釉薬-明オリブ灰色。F. 高台部1/4。G. 釉薬ハケ塗り。H. 覆土。
4	青磁 碗	B. ロクロ成形。C. 内面、印花文。E. 釉薬-灰オリブ色。F. 破片。H. 覆土。

定される。東西方向の遺存長86cm、南北方向の長さ96cm、遺構確認面からの深さ27cmを測る。底面は平坦であり、壁はやや角度をもって直線的に立ち上がる。

本遺構の覆土は3層に分層され、いずれの層にも未風化の黄褐色土粒子・小塊が含まれ、また堆積の角度から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本土坑の帰属時期は、覆土中遺物および覆土から平安時代以降と考えられる。

第2号土坑(第24・30図)

調査地点の中央西寄りに検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第1号溝址および第1号ピットによって切られ、第1号住居跡および第3号土坑を切って造られている。

本遺構および第3号土坑は、暗褐色土を主体土とする第1号住居跡の覆土を掘削し埋没していることから遺構確認における認識は困難なものであり、第1号住居跡を掘り下げる過程において検出されたものである。平面形態は方形を基調とするものと考えられる。

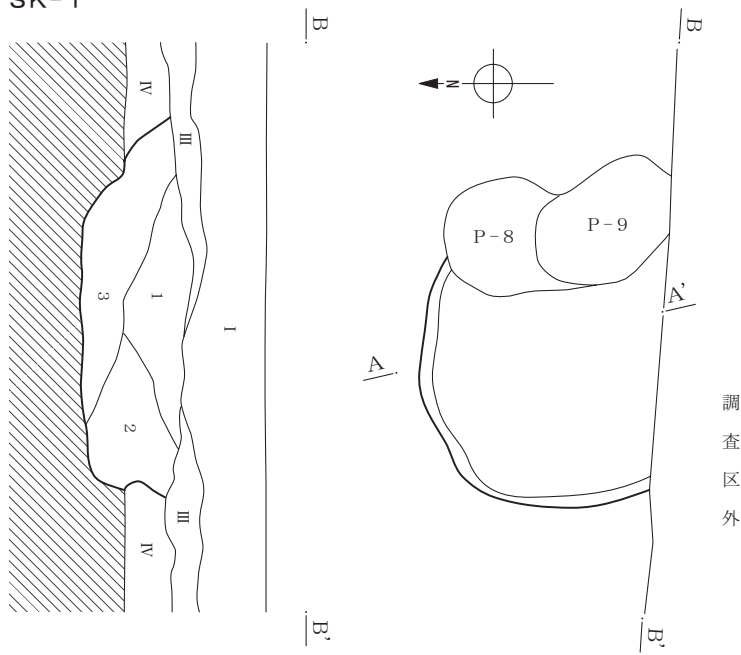
本土坑の帰属時期は、他遺構との重複関係から平安時代以降と考えられる。

第3号土坑(第24・30・32図、第12表、図版10)

調査地点の中央西寄りに検出した遺構である。遺構確認面は、黄褐色土層上面である。第2号土坑によって切られ、第1号住居跡を切って造られている。本遺構の覆土は、暗褐色土を主体土とする第1号住居跡の覆土を掘削し埋没しているものである。平面形態は方形を基調とするものと考えられる。

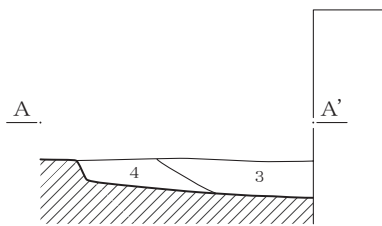
本土坑の帰属時期は、他遺構との重複関係と出土遺物から平安時代以降と考えられる。

SK-1

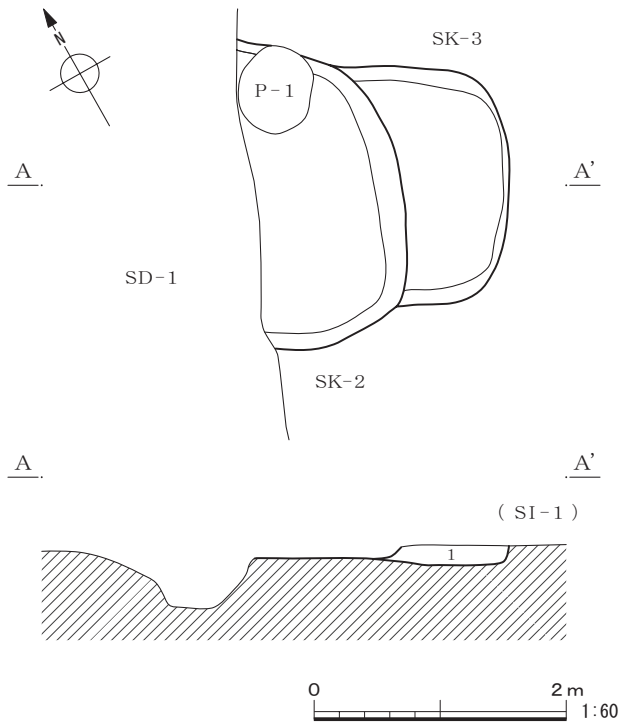


SK-1 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊(～1cm)を少量、ローム粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 2 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を小塊状(～5cm)に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 3 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊(～2cm)・ローム粒子(～1mm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 4 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



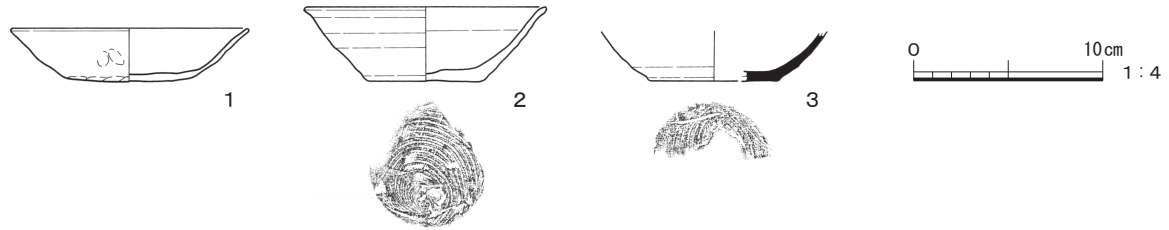
SK-2・3



SK-3 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊(～2cm)を微量、ローム粒子(～2mm)・炭化物粒子・焼土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第30図 第1～3号土坑平面図・断面図



第31図 第1号土坑出土遺物

第11表 第1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	土師器 坏	A. 口径(12.4)。器高2.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。底部ケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一橙色。F. 1/8。H. 覆土。
2	須恵器 坏	A. 口径(12.6)。底径6.2。器高3.9。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転糸切り。D. 赤色粒。E. 内外一にぶい黄橙色。F. 1/4。G. 酸化焰焼成気味。ロクロ右回転。H. 覆土。
3	須恵器 坏	A. 底径(6.6)。残存高2.6。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転糸切り。D. 細砂粒。E. 内外一暗灰色。F. 1/2。G. 還元焰焼成。ロクロ右回転。H. 覆土。



第32図 第3号土坑出土遺物

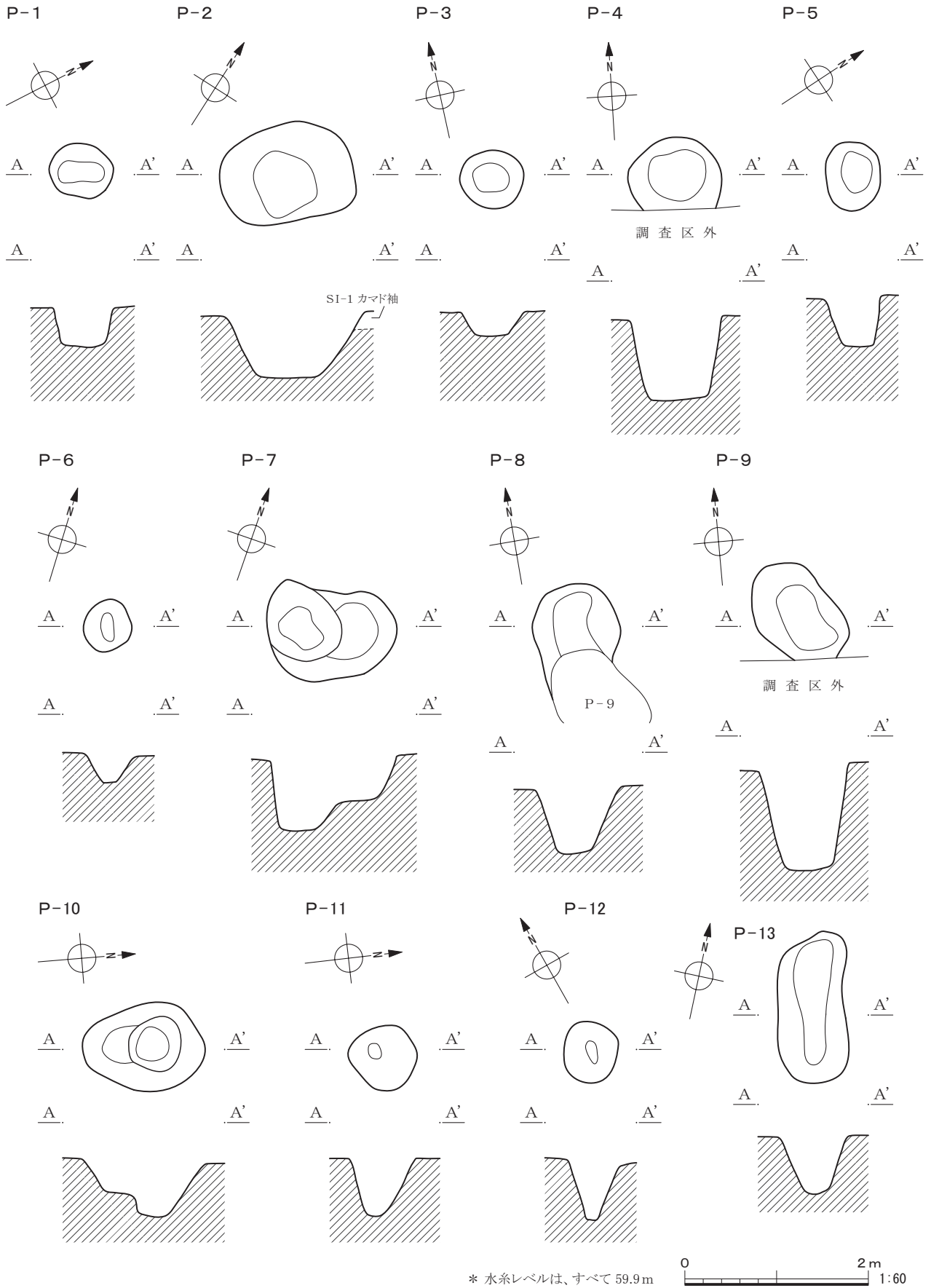
第12表 第3号土坑出土遺物観察表

No.	器種	A. 法量 B. 成形手法 C. 整形・調整の特徴 D. 胎土(材質) E. 色調 F. 残存度 G. 備考 H. 出土位置・層位
1	須恵器 坏	A. 口径(11.9)。底径(6.0)。器高3.4。B. ロクロ成形。C. 内外面、回転ナデ。底部回転糸切り。D. 石英・黒色粒。E. 内外一灰色。F. 1/4。G. 還元焰焼成。H. No.1。

4. ピット

第1～13号ピット (第24・33図)

本調査地点においては、13基のピットが検出されている。これらのピットは、調査区中央西寄りから南壁付近において第1～5号ピットが、調査区中央北寄りにおいて第6～7号ピット、そして調査区東側南壁付近において第8～13号ピットにおいて検出されたものである。重複関係は、第1～3号ピットが第1号住居跡を切っており、このうち第2号ピットはさらに第2号土坑を切っている。また第8～9号ピットは、第1号土坑によって切られている。第7・10号ピットのように異なる底面を有するものもあり、掘り返しあるいは重複の可能性も考えられるものもある。同様に第13号ピットは、底面は平坦なものの、平面形態が長楕円形をなすことから、掘り返しあるいは重複の可能性も考えられる。その他のピットの平面形態は、やや不整なものも含まれるものの、いずれも円形を基調としている。本土坑の帰属時期は、他遺構との重複関係および覆土から平安時代以降と考えられる。



第33図 第1～13号ピット平面図・断面図

第VI章 まとめにかえて

左口遺跡は女堀川中流域に相当し、本庄台地と生野山丘陵に挟まれた、沖積低地帯中の微高地上に所在している。本遺跡は、本報告地点発掘調査に先立つ試掘調査によって、従前の遺跡範囲が南側に広がる事が明らかとなったものである。

今回の左口遺跡B地点における発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡6軒が検出された。いずれの住居跡も重複関係となる位置か、或いはほぼ同じ位置に建て替えられたかのような密集した状態で検出されている。調査区の制約上推定の域を出ないが、本調査区における竪穴住居跡の在り方は一定の空闲地を有し、その空闲地間において重複して住居が構築されているものと考えられるものである。周辺地域におけるこのような事例は、今井川越田遺跡（磯崎 1995・伴瀬 1996・滝瀬 1997）や金佐奈遺跡（徳山他 1999）において確認されている。このような限定された区域内における継続的な居住行為の累積は、一定の集団の占有し得る占有地の存在と持続性を物語るものであろう。

本庄飯玉遺跡は、今回初めて発掘調査が実施され、その一端が明らかとなったものである。本調査においては古墳時代および平安時代の竪穴住居跡が検出されている。しかしながら第1号住居跡の覆土からは、奈良時代の土師器が多数出土している。このことから近隣に該期の遺構の存在が予想されるものである。また、同様に第1号住居跡の覆土中からではあるが27点の土錘が出土しており、これらの遺物は周辺地域における古代の生業を考える上での重要な資料といえよう。

北堀新田遺跡は、本庄台地南端部と大久保山丘陵の間の低地帯に相当し、本遺跡は北東方向に流下する男堀川・女堀川に挟まれた微高地上に所在している。周辺地域における古代集落は、奈良時代以降激減する様相を呈している。このような状況のなかで、本報告地点において1軒ではあるものの平安時代竪穴住居跡が検出されたことの意義は大きいといえよう。

今後の資料の増加に期待したい。

参考文献

- 磯崎 一他 (1995)『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第171集
大谷 徹 (2007)『夏目・夏目西・弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第346集
太田 博之・松本 完 (2009)『雌濠Ⅱ・笠ヶ谷戸・小島本伝』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第15集
太田 博之 (2011)『本庄城跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第25集
恋河内 昭彦 (2011)『七色塚遺跡－B 1 地点－ 北堀新田前遺跡－A 1 地点－』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第7集
佐々木 藤雄 (2010)『北堀新田遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第22集
瀧瀬 芳之他 (1997)『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集
徳山 寿樹 (1994)『平塚・左口・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書 第16集
徳山 寿樹他 (1999)『金佐奈遺跡Ⅱ－B 地点の調査－』児玉町文化財調査報告書 第33集
伴瀬 宗一 (1997)『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第179集
松本 完 (2009)『久下前遺跡Ⅲ（C 1 地点）・北堀新田遺跡Ⅱ（A 1 地点）・宍勝寺北裏遺跡Ⅲ（A 1・B 1 地点）』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第23集
本庄市史編集室 (1976)『本庄市史』資料編

写真図版



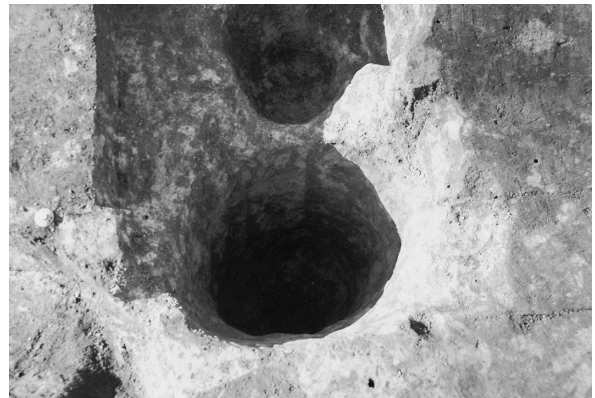
調査区全景 北西から



SI-8 掘り方完掘状況 北西から



SI-8 土層堆積状況 南から



SI-8 主柱穴完掘状況 西から



SI-8 ピット内遺物出土状況 西から



SI-9 床面完掘状況 西から



SI-9 掘り方完掘状況 西から



SI-10 完掘状況 西から

写真図版 2



SI-10 掘り方完掘状況 西から



SI-10 土層堆積状況 東から



SI-10 カマド完掘状況 南から



SI-10 遺物出土状況 北東から



SI-11 完掘状況 南から



SI-11 掘り方完掘状況 南から



SI-11 カマド完掘状況 南西から



SI-11 貯蔵穴完掘状況 南から



SI-12 遺物出土状況 西から



SI-13・14 完掘状況 東から



SI-13・14 土層堆積状況 西から



SK-52 完掘状況 北から



SK-53 完掘状況 北から



SK-54・55 完掘状況 東から



SK-56・57 完掘状況 北西から



作業状況 北東から

写真図版 4

SI-8



1

SI-11

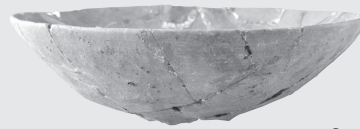


1

SI-10



2



2



3



5

SI-12



1



2

出土遺物



調査区全景 (1) 南東から



調査区全景 (2) 南西から



SI-1 完掘状況 北東から



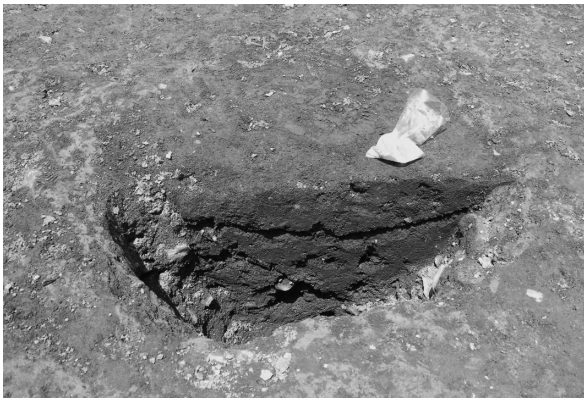
SI-1 掘り方完掘状況・土層堆積状況 (1) 南東から



SI-1 土層堆積状況 (2) 南西から



SI-1 支柱穴完掘状況 南東から



SI-1 支柱穴土層堆積状況 南東から



SI-1 梯子ピット完掘状況 南東から

写真図版 6



SI-1 梯子ピット土層堆積状況 南西から



SI-1 床面上粘土断面 南西から



SI-1 遺物出土状況(1) 北東から



SI-1 遺物出土状況(2) 北東から



SI-2 完掘状況 南東から



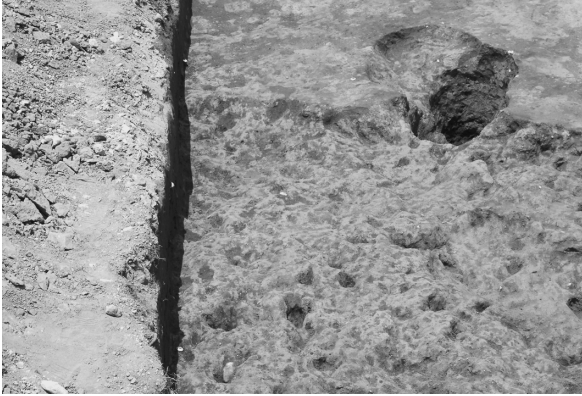
SI-2・3 掘り方完掘状況 南東から



SI-2・3 土層堆積状況 北東から



SI-2 遺物出土状況 南から



SI-3 掘り方完掘状況 南東から



SI-3 遺物出土状況 北東から



SK-1 完掘状況 南東から



SK-2 完掘状況 北西から



SK-3 完掘状況 北東から



SK-4 完掘状況 北西から

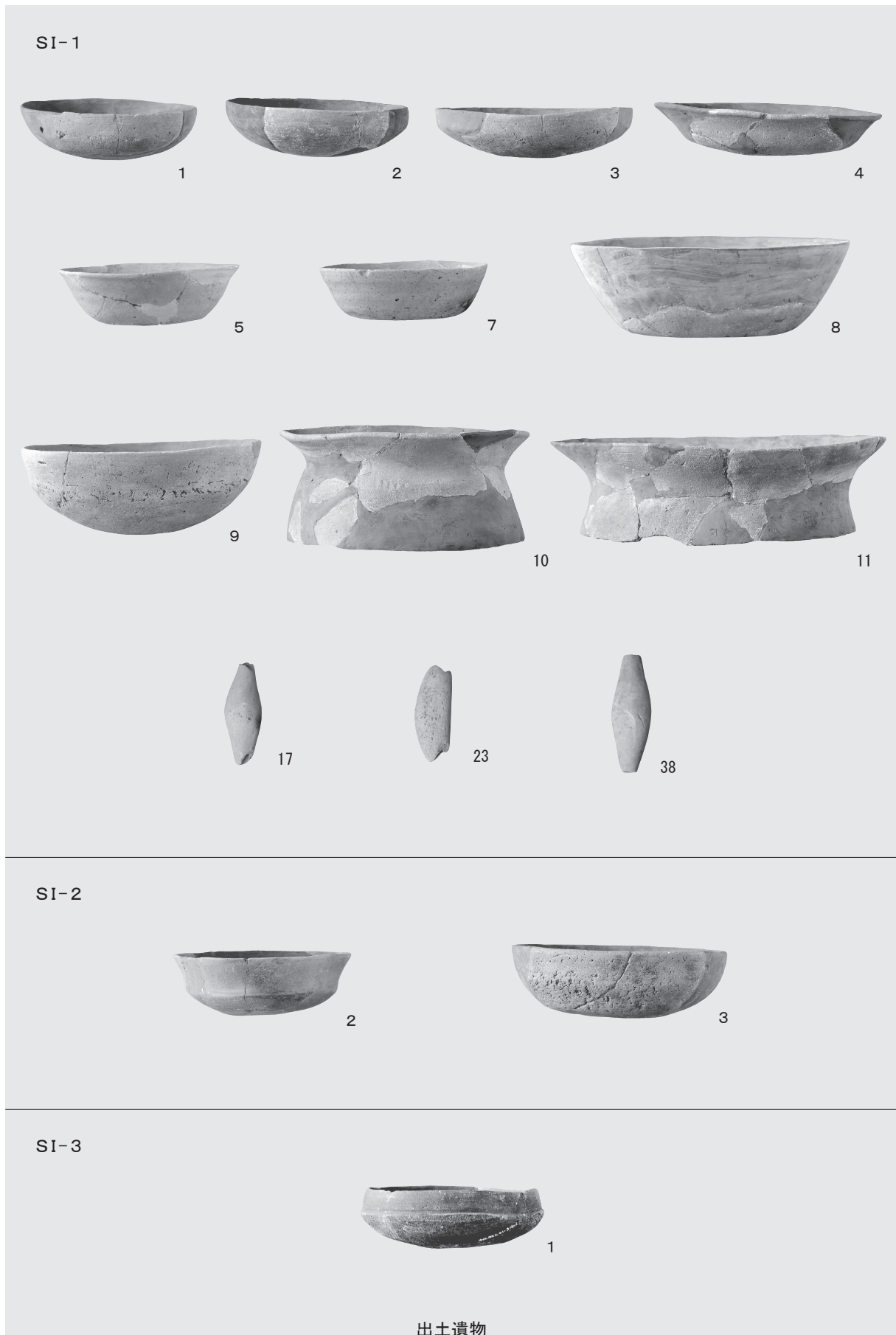


表土掘削作業状況 北東から



遺構掘削作業状況 南から

写真図版 8





調査区全景 (1) 北から



調査区全景 (2) 東から



SI-1 完掘状況 南西から



SI-1 掘り方完掘状況 南西から



SI-1 土層堆積状況 南西から



SI-1 掘り方土層堆積状況 北東から



SI-1 遺物出土状況 (1) 南東から



SI-1 遺物出土状況 (2) 南西から



SI-1 カマド完掘状況 南西から



SI-1 貯蔵穴完掘状況 南西から



SD-1 完掘状況 北西から



SD-1 土層堆積状況 西から



SK-1 完掘状況 東から



SK-3 土層堆積状況 北から



覆土掘削作業状況 (SI-1) 北西から



遺構実測作業状況 (SI-1) 南東から

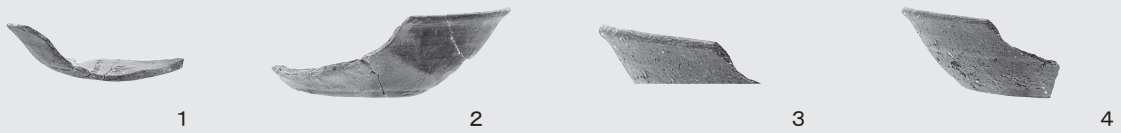
SI-1



SD-1



SK-1



出土遺物

報告書抄録

フリガナ	サグチイセキⅡ－Bチテンノチョウサ、ホンジョウイイダマイセキ、キタボリシンデンイセキⅢ－Dチテンノチョウサ－								
書名	左口遺跡Ⅱ－B地点の調査－、本庄飯玉遺跡、北堀新田遺跡Ⅲ－D地点の調査－								
副書名									
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書				巻次	第34集			
編著者	大熊季広								
編集機関	本庄市教育委員会								
所在地	〒367－8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 Tel.0495－25－1185								
発行日	西暦2013年（平成25年）3月22日								
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡	(° ' ")	(° ' ")					
サグチイセキ 左口遺跡 チテン B地点	ホンジョウシ コガマチョウ 本庄市児玉町 ヒルカワ 蛭川100－2		112119	54-020	36°12'38" (世界測地系)	139°08'55" (世界測地系)	20091214 ～ 20100106	48.5㎡	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
サグチイセキ 左口遺跡 チテン B地点	集落	古墳時代	竪穴住居跡7軒・土坑6基			土師器			
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡	(° ' ")	(° ' ")					
ホンジョウイイダマイセキ 本庄飯玉遺跡	ホンジョウシ ヒガシダイ チョウメ 本庄市東台3丁目 ホカ 3809－2他		112119	53-020	36°14'15" (世界測地系)	139°11'53" (世界測地系)	20100601 ～ 20100612	51.3㎡	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
ホンジョウイイダマイセキ 本庄飯玉遺跡	集落	古墳・平安時代	竪穴住居跡3軒・土坑6基			土師器・須恵器・土製品			
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡	(° ' ")	(° ' ")					
キタボリシンデンイセキ 北堀新田遺跡 チテン D地点	ホンジョウシ キタボリ 本庄市北堀 1548－1		112119	53-062	36°13'19" (世界測地系)	139°11'07" (世界測地系)	20110601 ～ 20110613	51.6㎡	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
キタボリシンデンイセキ 北堀新田遺跡 チテン D地点	集落	平安時代	竪穴住居跡1軒・溝址1条・ 土坑3基・ピット13基			土師器・須恵器			

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第34集

左口遺跡Ⅱ

－ B地点の調査 －

本庄飯玉遺跡

北堀新田遺跡Ⅲ

－ D地点の調査 －

平成25年3月18日 印刷

平成25年3月22日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／株式会社タカサキ印刷

